
キリンの夜明け

Antonio della Scajoli

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリンの夜明け

【NZコード】

N1181X

【作者名】

Antonio della Scaioli

【あらすじ】

へんてこな金属の装甲をつけたキリンの冒険。動物園が壊れ外に出たものの、堀の外は想像とはかけ離れた破壊された世界だった。降りかかる困難と対峙しながらキリンはどんどん成長していく。そして夢にまで見た海に到着したキリンは新しく出会う文化に触ながら、生き物について、この世界について、様々な答えを見つけていく。主人公のキリンが人間達の忘れていた優しさや正しさを代弁していく。このままで本当にいいのか?!現代日本人に問いを投げかける。

はじまり（前書き）

動物園を襲つた突然の大きな揺れ。仲間たちが次々と悲劇に巻き込まれていく。でも、事件はそれだけではすまなかつた。キリンはピュアな感覚で、自分に振りかかつた物語を淡々と語つていく。彼の叫びは人間達の良心に届くのか！

はじまつ

> 32511 — 4132 <

第1章

「はじまり」

1900・・・? 何年だったかな? いや2011年だ。
極東のなすのヘタのような形をした小さな国で、たいそうヤバイものが壊れた。

以来、俺はこれを着ている。丸でこりこり。つるつるでピカピカ。

銀色に輝くボディーの外観は、なめらかな光沢を放ちながらじっとりと俺を包み込み

まるで上品なジュエリーのようで、ちょっと氣に入っている。

しかし、着心地はよろしくない。
足を入れる場所はなんとか4本付いているが、少し短めのが難点だ。

大事な首も窮屈極まりない。

太さに余裕がないというか、長さに気を配っていないというか、仕上げはいまいち。
なにせおそまつだ。

そとから見ると、一見ただのガラクタスチールに見えるが、粗大ごみではない。

そう、俺はキリン。キ・リ・ン。

「キリンって知ってるか? 知ってるよな?！」

あれが爆発する前の平和な世界を想像してみてくれ。

何の憂いもなく、大きくて、黄色くて、直線的な首がトレードマーク。

すんごくスタイリッシュユーボディのフォルムも完璧！

「そんな動物は俺達しかいないだろつ！」

大自然を表現するにはピッタリ！有名なもんだつた。

夕焼け空の地平線をバックに、芸術的なシルエットを浮かびあがらせる俺。

広大なサバンナの自然を雄大に駆け抜けれる俺。

仲間達とこのビューティフルな首を重ね合わせながら戯れる俺。ちょっとお茶目な黒のはんてんが体中につけて

「好きな動物は何ですか？」

なんて子供たちが質問されると、必ず「キリンさん」と答えられる。全宇宙が愛し、また愛されるべき生き物だった。

高いところの葉っぱを好物として、ギヨロッとした目が実際に可愛いかつた。

それが今となつてはどうだ？！

へんてこな丸い胴体。
重々しくて、冷たい手。

足ではなく、手を持つたのもこれが初めてだ。

カツチカチの縦長の切れ目からブリキでできた筒が伸びている。
トレードマークの首はそれに押し込められ、自由に顔も洗えやしない。

しかも首を動かせるのは縦方向のみ。
ぐるぐる回せるのはいいものの、しつぽを舐めることもできやしない。

このお茶目なアーマーで、時折舞つ砂ぼこりを防御しながら、今日も一日叫びます！

「もったくさんだ！！」

世間にブチ切れそうになりながら、薄暗く厚い雲の下。

”ヤツ”が噴出す悪魔の塵で、空や大地が汚されないことを神に祈り続けています。

おこでけぼり（前書き）

首の長いキリンさん。どうしてこんな姿になってしまったの？
キリンはあの時の出来事を話します。大きな揺れ。裂けた地面。
はたしてキリンに未来はあるのか？！

おいでけぼり

首の長いキリンさんが、どうしてこんな姿になってしまったのか？あらためてお話しします。

西暦でいう2011年。この年は本当に寒かった。

春先といつてもおかしくない季節。

その時はまだ雪が降り続き、サバンナ育ちの俺たちを苦しめた。そう、そして3月の11日。忘れもしない。両親の結婚記念日。大きな大きな地鳴りがおきた。

俺たち動物もゆったり、ゆったりと大地に揺るがされ、右へ左へ、上へ、下へ。

ぐらぐら、ガタガタ、ズズズズズ。

箱も、檻も、お密さんも、みんな、みんな、ぐるり、ぐるり。上下左右に振り回された。

そのうち地面が大きく裂けて、お隣の檻が一段下がった。

ラザニアのように重なった地面は、断面がむき出しへになり、地中に埋まっていた配管がまるで恐ろしい刃のよう。

そこから勢いよく水が噴き出した。ローマの噴水も顔負けだ。お隣のサイはちょうど水浴び中。

何も分かっていないのか、親子で仲良く洗いつこしている。その時、さらに大きな揺れが彼らを襲い、水溜りで子サイが足を滑らせた。

お父さんサイ、お母さんサイは助けようと懸命に頑張つたが、何せすごい揺れ。

自分たちが踏ん張っているのが精いっぱい。そこに裂けた地面が襲いかかる。

もう、どうすることもできなかつた。飼育員さんたちは一田散に逃げ出した。

「俺たちのはじうなる？！」

「俺たちは檻の中でもじうある」ともできないじゃないか？！」

そんな叫び声だけが人間たちの後をむなしく追いかけていった。やはり俺たちは下級の愛玩動物。

命を懸けてまで守るべき存在ではないのだ。

あの優しかった飼育員のおねえさんも。

毎日通つて俺達の絵を描いてくれた、氣のよさそうなおじさんも。みんないなくなつた。

みんな、みんな。

そうだ！ゴリラたちのはじうだ？！あいつらは俺たちの中でも人間に一番よく似ている。

仕草だってそうだ。本当によく似ている。2本足で立つて、手を使う。道具も使う。

その巧みな技と、脳を使って、うまく逃げ出すんじゃないかな？！長い首を振りかざして、あいつらの檻を見た。

「おおおおー・やつぱつす、」

「よじ登つてこるー！」

深く掘られたコンクリート製の穴。こつもはよじ登ることもできな
い。

その壁をうまく登つてるじゃないか！

崩れかけた壁の割れ目に手足を起用に引っ掛けながら、上へ上へと次から次へ。

なんといっても手が自由だ！足が4本の私たちとは大違い！

くそつ！…あいつらはやはり違うんだ！

この星一番の生命の長。靈長類なのだ！

「おこー、ゴコラー、こやー、ゴコラさん、ちがうー、ゴコラ様！、ゴコラ親

分一ゴリラ陛下！」「ココラ殿下！」

「俺たちも連れて行つてくれ！いや、つれて行つてください！」

「お願いつ！お願いしまーす！ちがう！」

「お願い申し上げたまつりまするううううう……！」

「ほんっ！」

「んつ？？？？」

俺たちがそろつて顔をあげた瞬間、コンクリートでできた壁が崩壊した。完全に・・・。

ゴリラたちが落ちていく。下に、下に。

俺たちよりも数倍知能があるであるうゴリラ殿下様たちが、バラバラ、バラバラ、ズドオーン ズドオーン。

地面に叩きつけられて動かなくなる。

その姿はまるでゴミのようだ。黒いてんてんが地面に向かつて降つていく。

殺虫剤のひとつりで、お菓子の城に群がっていたアリ達が無残にもバラバラと剥ぎ取られていく。

そんな様子だ。

「ハア～。」

ため息だけが動物園にこだまする。

「やはり俺たちは完全に見放されたようだ。」

完全にそつ氣付くまでに、たいそうな時間はかからなかつた。

TSUNAMI（前書き）

水が川をさかのぼつてくる。

これが世界の共通語となつた” TSUNAMI ”

襲いかかる濁流。そして東の果てに恐ろしい化け物の気配が・・・

TSUNAMI

私たちのすみかは、河川沿いに作られていた。

大きな広い川の流れをいつもみんなで眺めていたものだ。

その川もある時は違っていた。いつもと反対。ま逆。上へ、上へ、川が昇つてくる。

「なんてこりた！水は上から下へさがるものじゃないのか！？」

「人間たちはそう言つていただろ？！」

「物理の法則つてそうじやないのか！？」

俺は、知つたかぶりな先生が説教じみた講義をしているあるテレビ番組を頭の中にリコードしていた。

高校講座「物理」だつたかな？卵が3個並んだマークのあの局の。それはさておき、ふと気付くと、すでに川沿いの町は水に飲み込まれていた。

動物園のあたり一帯は濁流の渦。

建物は水に飲み込まれ、ばらばらになぎ倒された森の木々があつち、こつちと暴れまわる。

船が丘の上まで運ばれて、自動車はまるでボートのよう。波に乗り、ひっくり返つて上も下もない。

どんどんどんどん山のほうへ押し流されていく。勢いを増した水は檻のすぐそばまで迫ってきた。

「ギョエエ～～！溺れ死ぬう～～！」

さすがにびっくりして、前足を大きくバタつかせながら押し寄せる大きな水の壁に備えた。

あと残り10cm！！1cm！！

「もう駄目か！！」

飲み込まれる覚悟を決めて、大きく息を吸い込んだ。

すると、何が起きたのか？濁流は俺たちの田の前でピタリと止まり、後ろに引き始めた。

そして、ゆっくりと遠くの方に帰つていく。

「つ、津波か・・・!?」

俺は思い出した。日本のトライディショナル。“TSUNAMI”。

もはや世界の共通語となつた“TSUNAMI”

彼は前回遠くの島を襲つた。

地球の真ん中。海峡に挟まれてジメジメと雨の多いあの島を。

そして10万以上の人間が死んだ。

津波は慈悲なく押し寄せ、何もかもを連れ去り、飲み込み、いなくなる。

何度も、何度も押し寄せて、大地のすべてを破壊していく。

俺は初めて味わう“TSUNAMI”的恐怖と強大なパワーに圧倒され、

今まで経験したことのない恐ろしさを感じながら、ブルブルと下半身を震わせていた。

と、その時だ。

耳をつんざくような「ボーン」という爆音が聞こえ、澄んだ空に巨大なキノコが現れた。

「キノコ雲。」

大きな大きな、天まで伸びる灰色のお化けだ。
てっぺんに丸い底帽をかぶっている。胴体はモクモク。長細い

シメジのよう。

でも、その細い胴体からは想像もできない程の強力な爆発音が鳴り響いた。

ピカツツと光つた光線の凄まじさも、この世のものとは思えない。それだけでも、何も知らない田舎キリンを降伏させるのに十分だつた。

お化けは天から俺たちを包み、邪悪をあたり一面に振りまきながら、見下すように立ちはだかる。

「何かふつてくるのか？！」

「何かをまき散らすつもりなのか？！」

俺はウロウロとあわてながら、今から起ころる最悪の事態に備えた。

「やつの場所は？」
「どっちだ？！」
「山は後ろにある。」「あれは東？！」
「東の果ての方！」「海！……」「そうだ海、海の方角だゾッ！」

俺がまだ、見たことも行ったこともない海。

いつかこの首を大きく上に突き出して、ジャボンと肩まで身をゆだねながら、海水浴をするのが夢だつた。

あこがれの紺碧。おだやかで、潮風が心地よいサンシャイン。

そう、あの、海。海の方向に違ひなかつた。

その時、俺は思い出した。

何年か前、人間たちが赤い鉢巻をまいて、集まつて、げんこつを天に突き出していた。

ある者は大きな旗をもつて、ある者は大声を張り上げ。長い長い列を作つて、海の方向にイカツテいた。

「怖いものがあるんだな。」

「本当に恐ろしいものがあるんだな。」

俺は何も知らない場末のキリンだが、何かとてつもない化け物が海辺にいることだけは知っていた。

「やつに何かがあった。ついにやつが動き始めた。」

脳の内側でシナップスに電流が流れ、俺の長い首と大きな体をガクガクと震えあがらせた。

アーマー装着（前書き）

ボロボロになつた動物園で、キリンは御用学者と出合つ。有無を言わさずアーマーを装着するはめになつたキリン。仲間は死んだ。みんな死んだ。でも2匹は生きている。一体何がどうなつていいのか？！学者たちは何も告げずに排気ガスの匂いだけを残して、とつと立ち去つに行つた。

アーマー装着

ボロボロになつた動物園に俺たちは取り残された。

俺、キリン1と仲間のキリン2の2匹。

やがて緑色のトラックに乗つた人間達がやつてきた。

全員がまだらな緑色のシャカシャカ力な服を着て、顔をマスクで覆っている。

大きな爆発が起つた後から、変わつた風体のお密さんが多くなつた。

執拗に俺たちの写真を撮つたり、なんだか変な光線をあてたり、毛を抜き取つたりもする。

キリン相手のストーカーとは、これまた気持ちが悪い。

ストーカーなんだから、ずっとまとわりつくのかと思ひきや、

時間を気にしながらすぐさま帰つて行く。

「一体何なんだ。」

「俺と居たいのか？」

「そうでないのか？」

「どつちかしてくれ！」

「気持ち悪いやつらだなあ！」

まだらの縁が引き揚げていくと、次に真っ白でシャカシャカの人間達がやつてきた。

たいそう多くの荷物を持っている。

スイッチがたくさん並んだ四角い箱や、チューブが何本も付いていいる円筒形のボンベ。

鉄骨で作られたクレーンもある。

どこかの実験室を丸いとこに持つてきたって感じだ。

「こいつらは一体何だ？」

わけもわからず動搖する俺にキリン2が言った。

「科学者だ。」

キリン2は知っているらしい。この真っ白が何者なのか。

「何故わかるんだ？」

「いや、俺がサバンナから連れてこられた時、こいつらに似た人間達が沢山いた。」

「病原菌が何とか。」

「ウイルスがなんとか。」

「そんなことを言いながら、いろんな道具で俺を調べたから。」

サバンナからは俺は飛行機、キリン2は船で運ばれた。
船でやつてきた生き物はすべて検査されたと聞いている。
人間のエゴなのだが、恐怖心なのだが、よくは分からぬが。
キリン2はそれに出くわしたようだ。
でも、今回の検査は前にあつたやつとはちょっと違うらしい。
もつと、もつと、危険な香りがすると言う。
装置は大掛かりだし、人間の数も桁はずれに多い。

「自分に自信がないのか？」

「こんなに大勢もいらないだろ？！」

「一体何を調べよつといつんだ。」

俺は人間という種族に一抹の軽蔑を伴いながら、心中でつぶやいた。

後から聞いた話だが、こいつらは御用科学者という種類の人間らしい。

御用学者は軋轢を嫌う。

権力に従う。

そして、何よりも自分が一番大事だ。金も大事だ。

だから、徒党を組んで行動する。

つるしあげられ、干されるのが嫌だから。

情報も、真実も、何もかもが多数の力でねじ曲げられる。

それを早く言つてくれれば、こんなアーマーつけさせなかつたのに。

御用学者達はさんざん議論するふりをして、俺達をベルトで拘束した。

事実を全く知らなかつた俺達は、なんだか地獄から天使に助けられたような気分になつて

いそいそと檻の中に入った。

檻に入るとガチヨンという大きな音がして扉に鍵がかけられた。出入り口はなくなり、俺たちは完全に閉じ込められてしまった。すると、右から、左から。

上から、下から。

学者達の手が伸びて、次々に眠くなる注射を俺達に差し込んだ。意識が朦朧となり、その後のことはよく覚えていない。

気を失つてしまつた。

その隙に、この変てこなアーマーを取り付けられたって事だ。

作業時間は10分程度と思われる。

眼にも止まらぬ早業で、まんまるでコロコロ、つるつるでピカピカに俺たちを押し込めたんだ。

押し込めるといえば、ゴールに3回ボールを押し込む事をハットトリックと言つ。

「田にもとまらぬ早業でー。なーげる手裏剣ストライク！」つてか。

「なんの歌だ！」

「忍者ハットトリック君。」

以来、身動きがきいちなく、不自由で、不格好なままの現在にいたつている。

なぜ俺達キリンが選ばれたのかは、皆田見当がつかない。

「大きくて、長くて、可愛いかったからか？ちつとも理由にならないぞ。」

「いや、待てよ。首が長くて遠くまで見渡せるからか？」

「それなら何でまんまるで口口口に入れるんだ？！」

「Jの説もちよつと違うな。」

ぶつぶつ考えてみたが答えは見つからない。しかし、まあ、兎にも角にも、まだ俺たちは生きている。

今のところ、これでやつしていくしかない。生きているだけでも儲けものだ。

あきらめにも似た無力感で気持ちがいっぱいになる。しかも、俺達の辺りに動いている仲間は誰もいない。他の種族も全部だ。

ライオン。トラ。ダチョウ。カンガルー。

みんな死んじました。

彼らがどうなったか、何となく想像できる。

落ちて行つたゴリラや、おぼれたサイなど、悲惨な現実を見てきたから。

考えるだけでいたたまれなくなる。

他にも、大きな地割れに飲み込まれたり、重いコンクリートに押しつぶされたり。

悲劇と言えば俺も悲劇に見舞われたのかも知れない。
なぜなら、こんなヘンテコに閉じ込められたのだから。

装着させられたアーマーは、これから起じる俺の未来を照らすのか
？ 曇らすのか？
はたして良いのか悪いのか？
ラツキーなのか違うのか？！

学者達は何も告げないまま、変てこなキリンと排気ガスの匂いを残
し、
呑み下せとこなくなってしまった。

キーンの別れ（一）（前書き）

仲良しのキーン。今までずっと一緒にいた。動物園のゲートをくぐり、希望に満ちた冒険が始まつたが・・・。

キリン♂との別れ（一）

の「しの「し、とい「うよつ、がきゅーん、がきゅーん。
以前のようなスタイリッシュさも、軽快さもない。

重々しい金属の手を左右に振りながら、村の大通りを東に進んでいる。

目の前には薄緑色のスクリーン。端っこではめまぐるしく数値が変化する。

胴体は「ロロロロ、ピカピカ。

俺が”東”と考えると、この丸い頭は「うーーん」と回転、東を向く。

”西”と思つと、これまた「うーーん」と西を向く。
まったく頭のいい洋服を考えてくれたもんだ。

食事もハイ・テクノロジー。

もう、以前のよつここの長い首をこつぱいに伸ばし、せりせりに光った高枝の葉をついぱむこともない。

何故なら、その必要が無くなつたから……。

お腹がすかないからだ。

動物園でこれをハメていつた学者たちは、チクリと一瞬俺の首筋に、管のようなものを付けていつた。

あれ以来。お腹はすかない。

おしつこも出ない。よだれも出ない。
なにも出ない。

もぐもぐ、むしゃむしゃする楽しみも奪われた。

生き延びるとは、かくも憂鬱なものなのか？！

ゆつやつゆつやと大地が揺るがされ、辺りはメチャクチャ、ボロボロになつた。

一体これからどうなるのか？

一向に見当もつかないまま、時間がだけが過ぎていつた。

ただ、そのまま動物園に居てはいけないと直感的に感じた。ちょっとと派手目で壊れかけた入場ゲートをくぐりぬけ、ここはもう外の世界。

動物園の外。生まれて初めて人間達の生息領域に足を踏み入れた。自由になつた2匹のキリンは少しばかりの開放感に包まれていた。

「こ、これが文明！」

「これが人間達が築き上げた文化社会！」

『 』

そこは俺達がイメージしていた豊かな風景とはおよそかけ離れた瓦礫と残骸の街。

绝望と悲しみが漂う場所だった。

2四は顔を見合せながら、大きな体の真ん中にある小さな心が押し潰されそうになつた。

「おいで、行け？」

もうひとつもなこと思つたのか、それとも氣を取り直したのか、キリン²が俺に尋ねる。

一海、海に行こう！

俺は以前から伝え聞いていたでつかい水溜りに希望を寄せ、ちょこ

と覗見させて そん齧れた

たこともない未知の世界。

俺はサバンナでも動物園でも感じた事のない深く澄んだ紺碧と潮風が心地よいサンシャインの楽園を想像していた。

考るだけで口元が緩んみ、アーマー装着以来、はじめてよだれが出た。

「でも、海辺には化け物がいる。」

「でかい化け物が怒つているんじゃないのか？！何かをまき散らして！」

「頭から湯気がでてるだろつ！怒つてるんじゃないのか？！絶対！絶対そうだ！」

キリン2はうるたえながら俺に訴えた。

しかし、俺のシナプラスは情報伝達構造として機能する事はなかつた。「情報は麻薬と同じ」海を想像した瞬間、まるで酔っ払いのようにドパミンが過剰に分泌された。

よだれを垂れ流し、緩んだ顔のままで、ガチャコーン、ガチャコーン、のつしのつし。

東へ、東へと歩みを進めて行つた。

動物園の近所を離れて俺達はずんずん前進した。頭の中には澄み切つた空。砂浜のバカンス！

「ピーコンシーピーコンシーピー

ヘルメットの中に突然アラーム音が響き、目の前のスクリーンが拡大表示になつた。

どうやら俺が望んでいることを自動的に読み取るらしい。

大量の水を感じしたようだ。海か？！憧れの海！…心地よい想像の世界が脳を占領した。

が、それは海じゃ無かつた。いや、間違つても海とは呼べない。だって小さすぎるもん。

湖だった。緑色のスクリーンにはデータがどんどん表示される。

水質・・・。

水温・・・。

などなど。

この国にて海のよつな水溜りがいくつもあると知った。

「ふう～。」

ため息がもれる。

が、キリン2は違っていた。

「やつたー海だぞー海だーお前の望みは叶つたんだー！」

キリン2はアーマーで覆われた肩で俺をいつきながら、よろいび、勇んで叫んだ。

彼は気の優しいイイやつだが読解力、理解力といつぱりおこして、やや能力が低い。

そもそも、こいつは海に行くのが嫌だったから、こじりで俺を止めたかったのかも。

海らしいところに着けば旅が終わるかもしねない。
安全なところに逃げ出せるかもしねない。

なんて考えてたようだ。

「俺は騙されないぞ。」

振り返つて、彼の瞳に合図を送つた。

「やつぱり駄目だったか・・・。」

キリン2は残念そうに首をうなだれた。

湖畔に沿つたワインディングロードを歩いていると、大きな道路にでた。

そこをドンドン進んで行き、緑色の看板が目立つ大きな高架の下をくぐつたあたりで、俺たちは街に出た。

街といつてもボロボロ、ぐちゃぐちゃ。

動物園のあつた村よりずつとひどい。

鉄道の駅があるようだが、とても駅には見えない。

線路は大蛇のように、うねって、ひん曲がり、カモノハシみたいな顔をした電車がホームで逆立ちしている。

幾重にも幾重にも重なりながら、まるでとぐろを巻いた巨大な白蛇だ。

駅へ続く3本の大通りは寸断されてしまつたようだ。大きな割れ目が地面に出来ている。

すぐに迂回路が検索され、スクリーンに地図が表示された。街の北側に川が流れている事がわかつた。

「これを下れば海に出られるぞ！」

俺が嬉しそうに言つと、キリンはしかめつ面で

「化け物ファン。」

と言つた。

その後もぶつぶつ愚痴をこぼしていたが、どうやら観念したのか、しぶしぶ後をついて来る。

相変わらず行き先について意見は合わないのだが・・・。

俺は手前の川沿いを歩いて進もうと言つが、相棒は川向うの道を進みたいと言つ。

間を取つて仕方なく、俺たちは川の中を進むことにした。

川面に足を踏み入れたその時。

「イテツ！！」

アーマーが変形し始めた。

「ういーん。ういーん。」

「かちやん。かちやん。」

4本の足が自動的に折りたたまれ、腹の部分からひれが突き出された。

「うわあっ、うわあっ、うわあっつ……」

キリン2は取り乱し、変形するアーマーにひどく驚いた様子で叫び声をあげた。

「まつたくこの服ときたら……。」

俺はこの状況に呆れ気味で、ガクガクする首を上下左右に振りながらアーマーのなすがままに体をゆだねていた。

「ぞぶーん。ぞぶーん。どんぶらー。」

俺たちは遊園地の白鳥ボートに乗っているかのように川面にブカブカ浮きながら、仲良く並んで下流に流されていった。

キリンとの別れ（2）（前書き）

ギリシャ 神話のヘラクレス。まだ緑の武装集団。いろんなやつらがキリンを危機に陥れる。そして、いよいよ親友との別れが訪れた。

キリン♂との別れ（2）

ひとしきり流されると、川は右に大きく曲がり始めた。
迂回作戦大成功！

「これで元あったコースに戻れるな。」

「左に進んで、右に曲がったんだ。間違いない。」

俺がそう主張すると、すっかり化け物におじけづいてるキリン♂は
「でも、本当にそつか？」

と、スッキリ晴れない顔をして、疑いの目で俺を見る。
そこでもう一度、俺はあたりの様子を確認する事にした。
スクリーンに映し出された航空写真を慎重に分析する。
やっぱり海が近くなっている。

マップに表示された俺達2匹の信号はさつきより確実に東の位置に
あつた。

「ほらっ、やつぱりだ！」

「お前にもデータを転送してやるからよーく見てみろー。」

その時、空から「ブーン」という大きな爆音が鳴り響き、
勝ち誇ってヤツに言った大事なコメントを書き消した。
俺が正しい時には、いつも何かに妨害される。まったくツイテない
い。

空から降り注ぐ爆音はあまりにも大きく、俺たちは思わずのけぞつ
て天を見上げた。

デッかい鳥の集団が何羽も何羽も列をなして近づいて来る。

「ブーンなんて、面白い鳴き声の鳥だな。」

キリン2は間抜けにも呟いた。

「そんな訳、絶対無い！」

俺は望遠機能を使って、再度しつかり飛行物体を確認した。ぼやけていた輪郭が徐々にシャープになりスクリーンに鮮明な映像が映し出された。

「正体が分かつたぞ！」

姿が明らかになつた飛行物体は、何と人間の乗り物。飛行機だ。デッかいデッかい飛行機の群れ。

一つ一つの機体には青いリボンのようなマーク。そして“ U S A

IR FORCE” と文字が表示されている。

C - 130 ハーキュリーズ (Lockheed C - 130 Hercules) . . . 輸送機。米国。

ハーキュリーズ . . . ギリシア神話の英雄、ヘラクレス。

全長 . . . 29 . 79 m

全幅 . . . 40 . 41 m

情報がスクリーンに流れ出た。

「米軍輸送機！」

「近くに空港でもがあるのか？」

救援物資でも運んできたのか、C130の群れは腹一杯で重々しく

飛んでいる様に見える。

高度を下げながら着陸態勢に入っているようだ。

なにせこれだけの災害だ。当然軍隊が動く。

彼らは同盟国として大規模な部隊を派遣して来たのだ。

「でも、なぜ今、アメリカ軍なんだ？」

「Uの国には軍隊は無いのか？最初に来るのは自国の軍隊だらう？」

「一体Uの国のシステムはどうなつているんだ？」

そう言えれば軍隊らしいやつらを見たのは動物園にいた時だけだった。
俺がストーカーと呼んでいた”まだら縁”。
それ以来、村でも、森でも、山でも、川でも、軍隊のようなものを
見かけた事はなかった。

考えると考えるだけ疑問が沸き起る。
でも、他国の軍隊が領空内を堂々と飛びまわるというオドロオドロ
しい光景を目の当たりにし、
何だか急に覚えもない恐怖を感じた。

俺達はいつでも逃げられるように身動きの取りにくいい川の中から陸
に上がり、

もう一度、東へ向かう広い幹線道路に戻った。
その時だ。「バン！」と一発の銃声がした。
なぜ銃声とわかるかつて？！目の前のスクリーンには鉄砲のマーク
が表示されている。

”Warning”と真っ赤な文字も点滅している。

「うわわわわわあ～！！！」

俺とキリンさんはビビりまくつておじつ」をちびつそつになつたが、
あいにく、よだれもおじつ」も出ない。

ちょっと助かつた気分だ。

スクリーンが拡大され、前方の詳しい様子が確認できた。

道路が封鎖されている！黄色と黒で彩られたしましまの柵。

その後ろにはしゃがんでいる人間と立っている人間が2列に並んで銃口をこちらに向いている。

まだら縁の全身つなぎとデッカい筒のついたマスク。たれたパンダのような目。

明らかに”やつ”から身を守る準備をした人間達だ。

「何処の軍隊だ！」

「まさか米軍！？それともこの国の？！」

「何でこんな時だけ出てくるんだ。」

「どうせ助けるならもつと早く来てほしかった！」

「しかも俺たちに銃を向けるってどういう魂胆だ。」

俺は本音と愚痴が混じりあつて支離滅裂に叫んでいた。
しかし、叫びは届かず、すぐに危機的状況に陥った。

「や、やばいっ！…」

「バババババツツツツツツ…！…！」

耳を塞がずにいられないほど銃声が響き、頭の上を銃弾が覆う。
俺たちは脚をかがめて姿勢を低くし、道路に転がっている崩れたコンクリートに身を隠した。

これで何とか相手の視界から逃れたが、銃撃は止む事もなく、さら
に激しさを増した。

「撃ちまくつてきたぞ！」

「それに撃つていいのか？！警告も何もないぞ…！」

チュンツ、チュンツ、と鋭い音をたてながら複数の弾丸がアーマーをかすめる。

相当動搖した様子のキリン²は慌てふためき俺に叫んだ。

「だいたい俺達が何の罪もないキリンだつて事、わかつてんのか？」

わからないだろ？ だつて今の俺たちは誰が見ても相当地に奇妙だ。地球外生命体の大気圏突入用カプセルか、どうひいき田に見ても外国部隊の新兵器つてところだ。

「反撃しなきや！ 何か使える物は？」

スクリーンには赤い鉄砲のマークが表示された。

「コレか！」

あわてて胸の下の方にあるボタンを押すと、つるつるの背中が左右両側に開き、大そう立派な武器が現れた。
機関銃？いや、ビーム砲にも見える。

「これで勝てる！」

俺たちは大きく頷き合つた。

「よしつ行くぞ！――」

すばやく飛び出し²匹は攻撃態勢に入った。並んで同時に前かがみなり、敵をにらむと大きく背中を突き出した。
銃口は自動照準で敵を捕らえる。

「発射あ！！」

「プシュ～～ツ」

「えつ？」

弾が出ない。もう一度、

「発射！！」「プシュ～～ツ」「あれっ？あれれ？何かおかしいぞ？」

「何で、“ババババババババツン”じゃないんだ？？」

お互いの頭から水滴がしたたっている。

何が起きたのか確かめようと、キリン²の背中を見てみると、機関銃から勢いよく水柱が噴き出している。

「ひょっとしてこれって……。」

そう、放水設備。勢いよく水が噴き出す消防設備だった。

「あいやりやりやりやりや！」

2匹はあわててコンクリートの残骸に引き返し、息を潜めた。

形勢逆転。まだら緑の人間達からは激しい銃弾の嵐。

しかし、ここまで攻撃してくるなんて、よっぽどここを通したくないうだ。

何かを隠したがっている？！隠ぺいか？！人間達はいつも勝手だ。こんなヘンテコを着せていったかと思うと今度は銃撃。あいた口がふさがらない。

「あれとこれは違う種族。なのか？！」

「それならそれで、もうちょっと横のつながりを持つてくれよー。」

やうきれない思いで、2匹のキリンは草むらに隠れた。

「だから海は嫌だったんだ。」

キリン2がボソッと嫌味を言った。

あいつのふてくされた顔とキレのない嫌味を俺は生涯忘れる」とはないだろ?。

嫌みの事は置いとくとして、俺たちキリンが、身を隠すには、草むらは低すぎた。

田立つて田立つて仕方がない。色も黄色だしな。草の縁に曳く映える。どうにかしなくちゃ。そういう考えで、やつらはジープに乗りこんで、ビニールこじりながら近づいてきた。結構な数だ。

「やばこぞつーもつだめかつーーー！」

その瞬間。

「余震か？いや大きいぞ、新たな地震だ！」

た。

国道の盛り土がまるで柔らかな深雪のよつて、雪崩を起しへし崩れていた。
道路のアスファルトはバキバキと折れ曲がり、左右両側へこぼれ落ちる。

「おいつ！大丈夫か？！」

俺は相棒に向かつて思いつきり手を伸ばした。
しかし、あいつのウルウルの瞳がだんだん小さく遠のいていく。
そして非常にも、神は俺たちを別々の谷底へと導いていった。

キリンとの別れ（3）（前書き）

仲間と別々の谷に落ちてしまったキリン。一人ぼっちになつて心細さを知る。あたりを包み込むオドロオドロシイ空気に押しつぶされそうになるキリン。「でも絶対に諦めない！信じれば夢は必ず叶うから！」そう心の中で呟きながら海へと向かつて進んでいく。

キリン2との別れ（3）

キリン2と分かれて俺は一人ぼっちになつた。でも、相変わらず海に向かつている。

あの時バババババーンと乱射された弾を無我夢中でよけた。その後、深い谷へと転がり落ちた時、もう黙だまと思つた。しかし、まだなんとか息をしている。

「助かったのか・・・?！」

「あいつはどうなつた?」

「確か俺とは反対側に落ちていったよ!」

スクリーンからキリン2の信号が無くなつていて、随分と深い谷に落ちたのだろう。

緑色の地図上には、俺の位置を示す点滅がピコンピコンと光つていて、だけだった。

「一人ぼっちになつちましたか?」

何だかすごく心細くなつて、俺はため息まじりに漏らした。しかし、あきらめはしない。くじけちゃ駄目なんだ。初めて感じた外の世界。海へ行くと決めたんだ。だったらやつてやろう!じゃないか。

「絶対に諦めないぞ!」

「信じれば夢はず叶う!」

俺は自分にはっぱをかけて、海に向かつて進む事にした。そこには必ず夢があるはずだ。俺を導いてくれる何かが!

けもの道と言つのもおこがましい草むらの分け目。道なき道を東へ東へと進んで行く。

深い深い森の奥は静けさに包まれ、不気味が充満している。

キリンの細い華奢な脚では到底無理と思われた山道も、この頑丈なアーマーのおかげで何とか突破出来そうだ。

お生い茂る針葉樹の枝がちくちくとアーマーを傷つけた。湿り気のある泥んこの脚元はぴちやぴちやと跳ね、ボディのキラキラをどんどん曇らせていった。

しかも、歩みを進めるほどに心細さが増大する。

「あいつどうしてるかなあ？」

寂しさが募つてキリン♂を思い出す。しかし出てくるのはどれもこれも変顔ばかりだ。

大きく膨らました鼻に舌を突っ込んでいるあいつ。白田をむいて、首だけを後ろにまわし

「ポルターガイスト現象。」

とぐだらないネタをするあいつ。

ほんとう、ぐだらないキリンだった。

今となつてはあのしまりの無い顔も、ウジウジした性格もやけに懐かしく思えてくるのだが。

「でも駄目なんだ！」「前に進まなきや！」

ブルンブルンと頭を振つて、あいつとの思い出を頭から振り払つた。気持ちを切り替え小道を進む。

しかし相変わらず静まり返つた森の中は、物音一つしない静寂に包まれている。

あまりにも何も聞こえてこないので、俺は外部集音器の感度を上げてみた。

すると「カラカラ」と遠くで水の流れるような音を感じした。」

「川があるのか？でも、ちゅうと音が小さいな。」

「前のよひこ、どんぶらー。どんぶらー。とは、こきさうこないな。

」

そのまま直進すると、小さな谷間に小川のせせらぎを見つけた。

「水だ！流れている！」

「じゃあ、下流に海があるはずだ！」

少し光が見えてきた。少しの希望に後押しされて俺は流れに沿って河原を進む事にした。

ゴロゴロとした大小の石が想像以上に4本の足を苦しめる。およそ今まで体験した道路とはかけ離れ、歩きにくかったらありやしない。

ガタガタ、ゴシゴシ足をすくわれる。

「でも、この先に海があるから……。」

そう思う事で、何とかモティベーションをキープすることができた。ずしりと重い首を上下に揺らじ、酔っ払いのよひこふらふらと歩いていると

小川の水面でキラキラと何か光っている。

ダイヤモンドかはたまた金か？！金色の波がさざ波を作り出している。

「おおつー黄金のせせらぎー。」

「これで俺様も億万長者だ！」

俺はお宝を見つけた悪徳商人になつた気分になつて、キラキラの金色に向かつて走り出した。

「ガ――――ン！」

「勘弁してください。」

あまりにも想像とかけ離れた光景が眼下に広がる。

俺は黄金の国ジパングからスラム街の一角に一瞬で放り出されてしまった。

黄金とは腹を上にした川魚の群れ。当然、全魚死んでいる。死体の山だ。

プカプカ、プカプカ漂っている死んだ魚の白い腹を、珍しく差し込んだお日様が自らの光に反射させていた。

キラキラ輝く金色をかき分けるように何かが流れてくれる。

「な、なんだ？！羽が生えてんぞ。」

てかてかの羽毛をプラチナ色に染めながら、野鳥の死骸が流れてきた。

いろんな物が流れついた先で、鹿やイノシシ達が頭を水中に突っ込んで息絶えている。

おそらく水飲み場だったのだろう。

乾ききつた喉を癒す為にここに集まってきたに違いない。毒でも流れているのか？！死が満ち満ちた邪悪な光景だ。

昆虫や鳥、微生物にいたるまで、この森には一つの生命反応も無かつた。

ライフルを持った迷彩服はこれを見せたくなかつたのか。封鎖地点から東側に、もう生き物は居ないのかもしねれない。

犬もない。猫もない。ネズミもない。もちろんキリンもいない。

もちろん人間も。

ほんとに何もいない・・・・。

俺は悲しみに打ちひしがれながら、黄金の泉を後にした。よいしょ、よいしょと谷間を後にし、少し小高い丘を登つて行った。するとまた道路に出た。

「また、同じところ？」

キリンにしてみれば舗装された道路はどれも一緒に見える。しかも、山道の景色に差など見つけられない。

再び舗装された道路に戻り、振り出しに戻ったような無気力感に襲われた。

しかし、帰ることも投げ出すこともできず、俺はだらだらと東の方に向へ進んだ。

「絶対に諦めない！信じれば夢は必ず叶う！」

と、心の中で叫んでいた。

希望のともしびを消さない為にも・・・・。

ち・で・じ・か（前書き）

あたりを取り巻く恐ろしい光景。キリンはいろんな災難を乗り越えながらもユーモアを忘れずに前進する。そしてあわてて逃げていく人たちのトラックからこぼれ落ちた新しいアイテムをGetする。

ち・で・じ・か

スクリーンには絶えず、方位が表示されている。これなら東西を間違えることもない。

便利といえば便利だが、なんだか自分の意思に関係なく進む方向が決まっているようで、

少し不思議な感覚を覚えた。くねくね曲がった林道を抜けたところで、生命反応を確認した。

向こうから迷彩服じやない人間たちが乗つた自動車がやってくる。すれ違いざまに荷台を見ると、品物が山と積まれていた。

あわてて載せたのか、色々と雑多に混ざり合つている。

ふとん。テレビ。タンス。米だわら。・・・・・etc。

ほつかむりをした荷台はなんともいい加減に縛り上げられており、荷物がいつ落下してもおかしくない様子だ。

そんな事もお構いなしに、猛スピードで県道を西へ進んでいく。逃げてきたのか？！それとも火事場泥棒？！なんの火事だ？！山火事か？！

「おーい。そっちへ行くとお巡りさんがいるよ。撃たれちゃうよおー。捕まっちゃうよおー。」

と冗談めいたフレーズを心の中でつぶやいた瞬間。ガンッ！頭に何かがぶつかった。

ドスン。ゴロン。ガチャガチャガチャ。荷台から落ちた荷物のようだ。

自動車は何も気付かず、俺とは反対方向に進んでいく。それどころではないらしい。

完全無視だ。

「やつぱり泥棒か？！」

「他人の物をぬすんだのか？！」

人間とはあさましい生き物だ。どんな時でも我欲に駆られる。

「少しばしは俺たち高貴なキリンをみならえつてえの。」

俺は去りゆく自動車の背中にあかんべーをした。

といつても正確にはヘルメットがあつて、あかんべーは出来ないのだが。

そして落つこちた荷物に走り寄つた。結構色々なものが置き去りになつている。

洋服に、スリッパ。ニンジン、大根。ポットや割れたお茶碗。枕に毛布。

俺はそこで箱型の電気製品を見つけた。

「これつてテレビじゃないか？！」

飼育員室にあつた古いブラウン管テレビ。

経営が苦しいのか、単にケチなのか、このじ時世でも、動物園に大画面薄型テレビは無かつた。

ウイーン、カチヤツ。ロボットアームで拾い上げ、眺めてみるとなんだか懐かしい。

白黒だ。へんてこりんな橢円形の針金アンテナが付いている。

わざわざ電源コードをアーマーの外部コンセントに差し込んでみた。

「お、映るじゃないか！」

ビヨーンと波打つた画面が徐々にはつきりし、アナログチックな雰囲気をかもし出している。

地上を伝わるテレビ電波は、今年の7月、デジタル放送に完全移行！マスコットキャラクターはキリン！！！
と思いきや、鹿。地・デジ・化。

「ち・で・じか」

だつて。シャレの一種らしい。

地デジに“きりかえ”！

地デジに“キリン変え”！

なんてえのも、粹な風情でいいと思うんだが、そこまでの感性が機能しなかつたようだ。

俺は胸元にあるフックにテレビをかけると、特番で流れているニュース番組を聞き流した。

やつが暴れだしている様子を一生懸命解説している。

「号機のあつりょくよーきが・・・・。」

「号機がメルトダウンし・・・・。」

なにがなんだかさっぱり理解できないが、この国は大変らしい。
ともあれ、これで何がおこっているのか？！少しは情報が得られる
よつになつた。

しつぽ切り（前書き）

人間にしつぽなんてはえてたか？純粹で素直な疑問。そこから、キリンは生き物すべてに共通する大事な答えを得る。

しつぽ切り

「えへ、本日、東日本にもたらされました、未曾有の大災害に対しまして、」

「国家非常事態宣言をえへ、発令いたしますーー！」

こつか、ひじょう、じたい、せ・ん・げ・ん！

「えー——————！」

これにはさすがにビックリした。國家？？！日本だよな？！平和だったこの国は、今、そんなやばい事になつていてるんだ！！いくらお馬鹿なキリンでも、やばいと言つ事くらいは理解できた。ちなみに馬鹿は”ウマ”と”シカ”と書く。

キリンの文字が入らなくて良かつた。

非常事態なんだから、何でもありつてことだよな？！

やつぱ、動物にも適用されるんだよな？！

当然キリンにも・・・・？！

そりや国道でうわうわしてたらバンバン撃ちまくられる訳だ。

その結果、仲間と離れ離れになつて。このつるつるピカピカも傷だらけだ。

で、何で今頃いきなり非常事態になつたのか？！

あれ以来、デカイ爆発もおきていないし、水も川をさかのぼつて来ない。

じゃあ、あの時は非常事態じゃなかつたのか？！

あの恐怖、失意のどん底だつた時はなんだつたんだ？！

だって、もう、随分と時間が経つていてる。

動物園の檻の中で天まで達する化け物を見てから、数日？！いや、10日以上だーー！

その間はどうなつていたんだ？

「非常」な「事態」では無かつたと言つのか？！

この国は本当に大丈夫だったのか？！

動物も！人間も！魚も！野菜も！草や木も！！

どうもおかしいと思つてたんだ。

なんだか空は、ずうーとうす曇りだし、生き物は何処にもいなし
魚が腹を上にして浮いているし。変な事だらけ。

動物園ではいつも二口二口笑顔で優しい。本足だったが人間つて
以外に信用できないやつらだ。

”やつ”は毒を撒き散らすと聞いたことがある。

空氣中に、雨の中に、土壤に、川に、そして俺の愛する海に。

”やつ”からでる小さい小さい灰の粒は俺たちの体をボロボロに傷
つける。

一瞬で死ぬものもいる。少し長く生きられるものもいる。
みなを同じようには傷つけない。

だが、確實に死の訪れを早めるのだ。

水色の高級力ーテンの前で演台に力強く手をつきながら声高らかに
宣言する彼の姿は、

一見カツコよくテレビに映し出されていったが

キリンの俺には、うそつき選手権の代表選手にしか見えなかつた。

昨日の国家非常事態宣言を受けて、なんだか慌ただしくなつてきた。
た。

テレビも一日中特別番組だ。

騒がしい報道センターで、小奇麗なスーツを着たイケメンとお姉さ
んが一日中ニュース原稿を読み上げている。

横から横から、次から次へ、ズーーーーと、読み上げている。

新品の作業着をきた人間たちが演説している。

なんだかそれだけでウソ臭い。

毒を撒き散らされたここ の現場とテレビスタジオの小奇麗さ。

ギャップを感じずにはいられない。

電力会社も最近テレビによく出てくる。彼らも毎日奇麗な作業着だ。たぶん”やつ”と重大な取引をしたのだろう。関係があるのは見ええた。

彼らの言つことは専門的すぎてキリンの俺にはよく分らない。でも、何度も何度も耳にする単語は、自然に覚える事ができた。

あと”じつも”。

原発号機。げんぱつ。じうき。じいつらはよく

三國志

この辺のそれも止まつた。一と向いのあそじも止まつた
とまつて、とまつて、進んで、進んで、3歩あるいて2歩上がる。
まるでワンツーパンチだ。

モードが!! いや違う 働キーラン

少し前の事が
落つこちたらしい。

お好み焼きじゃなく、もんじゃ焼きだよたがな。

できなかつた。

たくさん頑張り過ぎたのか、人間のオスが一匹、首をつって死んだ。ワイドショーでは、過激なゲストタレントが、”トカゲのしつぽ切

慣用句らしい。人間とトカゲ。哺乳類と爬虫類。

哺乳類・・・多くのものが胎生で、乳で子を育てるのが特徴で・・・
爬虫類・・・爬虫類の「爬」の字は「地を這う」の意味を持ち・・・

何かを考えると、すぐに目の前に「データが表示される。

それを参考に、俺なりの結論を得た。

しっぽのある人間は見たこと無いが、しっぽの無いトカゲはよく見かける。

トカゲは本当によく尻尾を切る種族だ。しかし、種族で分類はできないようだ。

人間も尻尾を切ることがあるらしいから。

蜥蜴のしっぽは切れても生えてくるが、キリンのしっぽは、切れた

ら生えてこない。

もう2度と生えてはこない。

生き物の命も、もう戻つてはこない。

2度と戻つてこない。

首をつったオスの命も、もう2度と戻つてはこない。

絶対に戻つてはこない。

これだけは正解に自信がある。

また嘘？（前書き）

人間って本当にあさましいな。何だかだまされるのに疲れてきちゃつた。嘘と本当が見えにくいこの世界で、キリンは斑点だらけの大きな胸を締め付けられる。

また嘘？

「またウソか……。」

この国では一見「つそ」が「正義」のように見える事がある。

「ます。」「こみゅにナーラーしょん。」「

不特定多数の大衆、つまり”マス”に大量の情報を伝達する手段。マスコミコニケーション。

この拾つた受像装置から毎日出合つ俺の体験とは、まったく違った情報が流される。

俺に装着されているガイガーカウンターは、いつもアラームが鳴りっぱなしなのに

テレビは子供たちを外で遊ばせてもいいと云えている。

俺が通称サングラスと呼んでいる”放射能可視化レンズ”を透して見れば

あたり一面放射能で真っ赤っかだ。

この辺に住んでいる牛や馬、俺と同種の生き物たちは何も知らずに、この真っ赤っかをもぐもぐ、むしゃむしゃ。

よだれと一緒にほおばつてゐる。

”やつ”には味がないからな。悲劇としか言ひようが無い。

「うわあ、うわあ、うわあ。」「

胸元にぶら下げるテレビから明るい音楽が聞こえてきた。

「もう7時だか。」「

「こんばんはニュースをお伝えします。」「

イケメン男性の挨拶に続いて、きれいなお姉さんが今日のトピックスを読み上げる。

まさに絶妙！間合いも完璧だ！

- 「 県は地元産 の放射性物質検査を拒否。」
- 「 原発 号機の汚染水を海に放出。」
- 「 市の漁港では魚の水揚げが開始されました。」
- 「 市教育委員会は学校給食の地産地消を推進。」
- 「 市の牛乳から基準値を上回る放射線を確認。」
- 「 大臣健康には直ちに影響なし。と「メント」

順番も内容もぐちゃぐちゃ。ネガティブ？ポジティブ？どっちなの？！

”やつ”がまき散らしたものは大量にある。

”やつ”に汚染されたものは何も売れない。

当たり前だ。

ビジネスの基本、それは信用。外国人の反応は早かった。
海外メディア向けプレスルームはそうそうに空っぽ。もう誰もいなくなつた。

製造業は大打撃。マーケットは大幅に値を下げた。

なのに、テレビは現場の真実を伝えようとしない。

このまま放置すれば、売る側も買う側もみんなが大変な被害者になつてしまつ。

「君たち当事者じゃないの？！俺から見たら同じ種類の動物だけど。」

「

頭の中に疑問がよぎる。そこからさらに俺は困惑する。

「いっぱい いっぱい エネルギーを使ったのは誰？！」
「いっぱい いっぱい 快適に暮らしてきたのは誰？！」

快適さの裏側には、苦労や問題を引き受けける人たちが居る。
快適なオフィスにエネルギーを届ける為に、不安でいっぱいだけど、
”やつ”を引き受けなければならなかつた人たち。

繁栄と郷愁・・・・。

相反する命題はこの世にいくつもある。

悲惨な現実と部屋の中の小奇麗さ。

ブランド物の高そうなステッツは、理性を守る唯一防御アイテムか？！
無関心な自分を演じる唯一の舞台衣装なのか？！

俺はまた、ふと、サバンナの大地を思い出した。

キリンには服はなかつた。はだかつペ。

およそ文明とはかけ離れていた。
情報を伝達する手段といえば、

「音」つまり泣き声か、

「首」つまり長い首をぶつけたり絡ませたりする動作のみ。

そんな俺達にも守るべき約束があつた。

”仲間を決して裏切らない。”
”種族を守るために努力する。”

生物として最も当たり前の真実。

生き物として最低限の心。

思いやり・・・・・。

もはやこの、黄色い肌をした一本足達には通じないのかと思うと
同じ黄色い動物として、大きな胸がやりきれない思いで一杯になつ
た。

大蛇と怪物（前書き）

邪悪な”やつ”の気配が感じられるようになったキリンに大きな力が襲いかかる。いよいよ第2章の幕が開けた。

大蛇と怪物

第2章

大蛇と怪物

俺の住む国のお隣さんは、なんと地震製造装置それをお知らせしておこう。

洋のもの、深く深く毎

毎日、毎日、ぶつかり合っている。

卷之三

地上の俺たちを困らせる。

モロコシ

まさに大自然の神秘、大いなる地球のいとなみと言へていいだNII
地上の支配者である人間達も、この「いとなみ」だけはどうしよう
もないようだ。

なんたつて相手は地球。ヒッケだ。

今度の一件も俺達にどうでは大きな大きな悲しき出来事だったが、ピックな彼にとつては、ほんの小さなくしやみ程度でしかない。そんな現実をつきつけられると、恐怖で背筋が凍るようだ。

”やつ”から半径20km以内に突入した俺は、

めく大蛇はヒビにながらも海と平行に走る国道を進む事はない。

まつすべ、まつすべ、たべたべ、たべたべ、

「びびびびび——」

稻妻が走つた！

「三口三口三口大約一...」

「誰だ？！ そんなに怒ってるの？！」

大体
種妻にて空しやなしの?!」

いわくは源氏物語

目の前の地面にジグザク模様が描かれた。まさに地上の稻妻。そして、デッカイ口を開けた恐ろしい怪物は、色々なものを飲み込んでいく。

今度はガードレールが食べられた。

おしまい 生も落ちてしく

道路の上に立つて、車の往来をうかがう。

このようにです。

しかし、たいていそんな腹ペニ野郎だ。

こんなに食へや
お腹も痛くなるだらけ

「ドドドドドオ~~~~!!!!

2回目の地鳴りが起きた後、大きな大きなその口はからうじて閉じられた。

正体を誰にも明かさぬままに・・・・・。

稻妻でも、モタンテサインでもない。

地面の善れ目は絶麗に纏われた傷口のよ

ま、平らな畠の真中を真っ一列に引き裂いて、静かに閉じられた。

つたかのよつに

大地の真ん中に無邪気な笑顔を作りだしていた。

回ぬ女（前書き）

”やつ”は明らかに生き物をむしばんでいく。狂った現実。狂った人間。狂った世界。キリンはその事実を田の当たりにする。

回る女

「グルグルぽんちい！」

「グルグルぽんちい！」

気が遠くなるような高い声を発しながら、変な生き物が近づいてくる。

頭は胴の2倍近くあり、両耳に細長い角が生えている。

短いスカートのような下半身。

すらっと伸びた脚はスーパー モデル級で、一瞬魅力的にも見えたが、何せおかしい。

キリンには想像すらできなかつた見たこともない生き物だ。そして甲高い声を上げながら、甘えたようなしぐさでグイグイ迫つてくる。

「たあーんたあーんしてみてえ～。」

「Turn ! Turn ! してみてえ～。」

接近は間近だ。

前方5m!!もう間に合わない!!

「ゴッキンー！」

ぶつかつた瞬間、俺は思った。

やられたんだな。"やつ"にやられたんだ。

至近距離でよく見てみると結構かわいい顔をしている。

大きなお眼はチャーミングであるでキリンのよう。

好みのタイプの人間だ。

しかし、ブルーに透けたゴーグル越しには悲しい表情。

つぶらな瞳から涙があふれ出している。

「死を覚悟しているのか？！」

「それでヤケクソになっているのか？」

本当のところはわからない。

でもほほをつたう涙は本物だ。

倒れこみそくなっている彼女を金属製の細い腕で抱きかかえながら、

俺の心はまるで昔の恋人に再会したかのようなゆるい空気に包まれた。

そして胸の中にフツフツと怒りがこみ上げてくるのを感じた。

「あの化け物だ！天まで届くような薄黒い灰のキノコ！」

俺は思わず叫んだ。

”やつ”から出るラジオアイソトープは半端じゃない。

気付かないうちに忍び寄る。

そして、思うがままに暴れまわり、地球上の生物をみんなおかしくしてしまつ。

色もない。においもない。音だつてない。

温かさも、冷たさも。なんの感触もない。

”やつ”には本当に何もない。本物のお化けだ。

俺達の肉体。細胞。ミトコンドリア。俺達の大変な大事なDNA。

そして俺達の心まで。生物の全てを傷付ける。

3人死んだ。5人死んだ。10人死んだ。

そしてここにはもう誰もいない。

「やつぱりこの人間もやられたんだ！」

今鏡をのぞいてみたら俺の頬はさぞひきつっている事だろ？
なにせ、何もかもが驚くことばかりだから。

目の前のスクリーンに発光ダイオードで描かれたデジタルでキュー
トな3D映像の彼女は、

まんまるい俺の姿を恨めしそうに眺めながら、俺の腕の中から旅立
つて、またもひたすら回り続けた。

ぐるぐる、グルグル。くるくる、クルクル。

そして約30秒後。

長く長く続いているアスファルトの地面の上で彼女は死んだ。

頑固なじいさん（1）（前書き）

放射能だらけの誰もいない町でキリンは老夫婦と出会つ。頑固なじいさんの胸の内に人間のやさしさをキリンは垣間見る。

頑固なじいさん（1）

俺は再び東に向かう道に入った。

なんとそこには動く影があった。一軒家に2つの生命反応がある。

動きは鈍いようだ。牛か？馬か？

人間か？透過フィルターにスクリーンを切り替える。

3本足！！！！！?????

そんな動物いたか？！

焦点を合わせると一本の足が異様に細い。

分析された情報が表示される。細い脚は木製だ。
スクリーンにくつきりと正体がうつし出された。
どうやら杖をついた人間の年寄りのようだ。

しかし、何故こんなところにいる。

危険が押し迫っているこんな場所に。

ゆっくりと近づいて、窓から中を覗いてみた。

じいさんと、ばあさん。

2人の人間が、締め切った家屋の中で、防護マスクをしながら静かにたたずんでいた。

「わしらはなんともないんじゃ。」

「今までこうしてここに暮らしてきた。」

「これからも何ともないんじゃ。」

2人は顔をつき合わせながらちやぶ台をはさんでうなづいている。
とうに避難指示が出されているこの地域で。

「彼らはここに居続ける気なのか？！」
「駄目になっちゃうんじゃないのか？！」

俺は、家の中に入り、じいちゃんとばあちゃんを「ここから逃がす事にした。

トントントン。

玄関の戸を叩き2人を呼んでみた。

「ダ・レ・カ・イ・マ・ス・カ・?！」

キリンなりの丁重な呼びかけは、外部スピーカーから人間の言葉らしく発せられた。
しかし、どぎれどぎれ。年寄りたちには聞こえないようだ。

「ほんにちは～、誰かいるかねえ～？！」

今度は、あらかじめメモリーに用意されていたベタなフレーズを再生すると、
ガラツと玄関の引き戸が開いて居間の奥からじいさんが現れた。
防護服のマスクから「シユウ～」と息が排出される。

「誰じや？！」

マスクに声がこもる。

「何のよつじや？！」

もじもじ声でさうて続ける。

「わしらは行かん。絶対に行かん。」

じいさんはすでに分かつていたよつだ。
はながら反対を言い切った。

まるまる、口口口の俺をキッとくらみつけ、奥の居間へと戻つて行つた。

どこか寂しげで、悲しそうな背中をしながら。
この土地が好きなのだろう。この土地を愛しているのだろう。
その思いは私たちキリンにも痛いほど伝わってきた。

「じいちゃん。こにはもうだめだ。」

「避難しよう。役場のみんなもそういつてただろう。」

誰もいない玄関で、奥の部屋に叫びながら、説得工作を続けた。
時間がたてば、じいさんが考えを変え、
自然と事態が好転すると甘く考えていたのかもしれない。

頑固な爺さん（2）（前書き）

爺さんのやせしむとは？！婆さんの氣持ちとは？！2人の年寄りに
いつたい何があつたのか？！爺さんの秘密がいよいよ明らかに！

頑固な爺さん（2）

家の周りに犬の死体がある。

小屋の中ではぎゅうぎゅう詰めになつた、鳥の死体。納屋の横では牛が目をひんむいて横たわつてゐる。

そんな光景を眺めながら、3時間ほどが経過しただろうか。

その時だ、家の中の生命反応が一つが点滅した。さう見えた。

じいさんか？！ばあさんか？！どっちだ？！

どちらにしても緊急事態には間違いない。

俺は何とか中にいる人間を助けようと、必死で戸をたたいた。

一ノナノシタノミツ

「じいさんーあけてくれーー家中で何があつたんだろうーー」

「具合が悪くなつたんじゃないのか？！」
「誰か倒れたんぢやないのか？！」
「助けたいんだ！お願いだ！」口を開けてくれ。」

しばらくするとガラッと音を立てて戸が開いた。

ばあさんだ。

「まああやん!逃げる気になつてくれたのか?…あつがとう…あつがとう…」

思わず感謝の気持ちが込み上げた。

俺の目の前に立つ年老いた女は返事にせしかつたが、防護マスクに覆われた首を少しだけうなづかせ、口を開く意思を示した。

「あー出よー。」

俺はウイーンと短い金属の手を差しのべたが、なんだか様子があかしこう。

生命反応はどうどん弱くなつて、ついにスクリーンの信号は光らなくなつた。

「何故？！何故だ？！」

「目の前にばあさんはいるのに？！何故？！何故消える！…」

俺は一瞬我を忘れて考えたが、起きている事態を理解することができなかつた。

もう一度しつかり確かめようと、ばあさんの顔を覗き込んで見た。しかし、生きているのか？死んでいるのか？防護服越しに見える顔はいつこうに区別できなかつた。

あーだこーだとしてこるうつけ、ふらつとばあさんの体が揺れて、俺の目の前で倒れた。

しわくちゃの顔に少女のような笑みを浮かべながら。

小屋の奥からじいさんの声がする。上ずつて、泣いているようだ。そして爺さんはそろそろと重い口を開いた・・・・。

頑固な爺さん（3）（前書き）

爺さんと婆さん。せつない別れを経験し、キリンは大きく成長した。
そして進む。前に向かって。次に待ち受ける厳しい現実を感じながらも、まだ何も知ることなく・・・。

頑固な爺さん（3）

「みんな死んでしまつたじゃん。」

「ばあさんまで。」

「ワシは逃げると言つたのに。何度も何度も言つたのに。」

「ばあさんの防護服には穴があいてしまつたんじや。」

「慎重に、慎重にここで暮らしてきたのに。」

「少しの暇も共にして。ばあさんとの暮らしを大事に大事にしてきたのに。」

「この前、ちょっとした事でわたくしに服をひつかけてしまつて。」

「ほんの少しだけほころびが出来てしまつた。」

「大丈夫。このくらい。大したことないや。心配する事ないや。」

「ずううどじいさんと一緒にいるから。」

と言つてガムテープでふさいでいたけれども、やつぱり心配していたとおりになつてしまつた。

「あいつは目には見えないが、どんな隙間からも入り込んでくる。死神を一緒に連れてな・・・。」

じこわんの目は涙で一杯だ。

「もう、駄目なんだ。みんな、みんなやつにやられるんじや。」

「この村はもう終わりだ。もう終わりなんじや。」

「わかつてんんだよ。本当は、わしにだつてわかつてん。・・・。」

。」

「だけどわしはもういい年じや。どのみち先はそんなに長くない。」

「生まれた村で、ばあさんと一緒に死なせてくれないか。」

「生れた村で、ばあさんと一緒に死なせてくれないか。」

「……で2人で眠りたいんじゃ……。」

人間とはなんともセンチメンタルだ。

野生の動物は、”生きる”事が最大の目的である。生きるためにすべての行動が合理的に機能する。食べる。寝る。逃げる。すべて生きるためだ。しかし、目の前にいる人間は死を急ぐという。

全く不可思議だ。

もしここに誰もいなくなり、何もかもが無くなつても、時がたてばまた、別の何かがここにやつて来る。

そしてそれらがこの場所で、また生きようと努力する。

増え、進化し。時が流れ、文明が起こる。

危ないことから逃げようとするし、危ないものも作らない。

それが、生態系というもののなのに。

ひょっとしたら人間とは生物ではないのかも知れない。もっと違う得体の知れない何か？！

俺たち動物とは全然違う別の物なのか？！

なんたつて”やつ”のような化け物を作つてしまつやつらだからな

?!

俺は一通り頭を悩ませ、

「長生きしなよ。」

そつ言い残し、村を後にした。

無人小屋の少女　（1）（前書き）

じいさんの家を後にしたキリンは誰もいない集落に入る。家の中は真つ暗。人つ子一人いやしない。そんな静寂を破るように異様な積み木の音が聞こえてくる。

無人小屋の少女（1）

じこわんの事をずっと考えながら、誰もいない農家の集落を進んでいく。

狭い狭い農村のせこ道だ。

でもそこには生き物の反応は微塵も感じられず、ただ、建物の暗い窓の中からシーヌンとした静寂が漂うばかりだった。

どこの家の窓も開いたままだが、電気も来ずに中は真っ暗。シーンと静まり返っている。

「カタツ。カタ、カタ。コトツ。」

あれ変だ。動くものは何もなく、ピーンと張りつめた空氣だけが漂うこの集落で、

暗く真つ暗な窓の中から小さい小さい音がする。

子供が何かで遊んでいるような音が。

何か生き物が居るのか？！

俺はその小さい暗闇の窓に顔を伸ばして中を覗いた。

「・・・。」

真つ暗だ。何も見えない。

当たり前だ。

そんな事を考へていると、まゆ毛の方が急に重たくなって、なんだか温かくなってきた。ひゅーーいーーー。

「あれっ！？なに？！」

氷のような涼しげな音と一緒に光線が放たれ、中の様子がスクリーンに映し出された。

丸く照らされたサーチライトの中に少女が見える。

「えつー・まじで！」

さすがにキリンである俺もビビった。

「カタツ、コトツ」という音は少女が遊んでいる積み木の音だった。俺は意を決して声を上げた。

「お嬢さん。お茶でもしませんか？」

「ダーダー。違う。そうじゃないだつー。」

頭脳明晰なアーマーの集積回路もこの現実に困惑氣味だ。

「もしもし、おねえちゃん。なにして遊んでいるの？！」

そうそう。その表現でよろしい。自分自身で納得。真剣な俺の気持ちが伝わったのかどうかはわからないが、少女はその声を聞き振りかえった。

そして積み木をどんどん積んでいた手を止め、目の前に広げてある無数のピースをコツコツ合図させ鳴らす事もやめ、俺の方に顔を向けた。

「よつしゃー今だ！」

俺は知りたがりの感情を爆発させ、彼女に質問した。

「お姉ちゃんは小学生だよね？」なんとか讷んで向をじている。お父さん、おかあさんは？」

彼女は元通り笑え返し、

「うーん、かわいらしいに両手につかんだ積み木を見せた。

無人小屋の少女（2）（前書き）

少女は一体どこの誰？どうして一人で？何を積んでいるの？キリンは背負わされた試練の行方を悟り、叫ぶ！

無人小屋の少女（2）

その手には位牌が握られている。
黒くて、大きくて、小さくて可愛らしい少女の手にはとうてい似つかわしくない。

それがお父さんとお母さんなのだろう。
大事に大事にギュッと握られている。
少女の前に山積みにされた残りの位牌は誰のものなのだろうか？
まさか他人のもの？！よくもこんなに集めたものだ。
まあ、こんな田舎だ。近所のおじいちゃんおばあちゃん
優しくしてくれた村の人たち。みんなが家族のようなものなのだろう。

沢山の思い出があふれ出しそうだ。

山積みになつた黒い塊は、身内も近所も区別せず、
まるで「みんな仲良し」と語りかけてくるように感じられた。
肩を寄せ合つて、恐ろしい外敵から身を守つているように
重なり、そして積まれている。

この村で一体何人の人が無くなつたのか？！

地震で、津波で、そして“やつ”の毒で。

何も知らされなかつた善意の人たちが、何も知らされないまま命を奪われる。

もつとちゃんと言つてくれていれば！
もつとちゃんと知らせててくれていれば！

何もなくなる前にいろんな事が出来たのに！いろんな命が救えたのに！

俺は何だか今まで自分が急にダメに思えて、一瞬鬱に襲われた。
目の前で少女は笑いかけてくれる。

その姿に力をもらいながら、精一杯気持ちを奮い立たせてみた。

「「」のままじや駄目だ。」

「「」のままじや何も変わらない！」

「もう目覚めなければいけない！」

「自分で考え、自分で決めなくちゃいけないんだ！」

「そして前進し、道をきりひらこう！」

そう思った瞬間、目の前にいた少女は、今まで一番の笑顔を満面に浮かべ

マスクに覆われた俺の目をじっと見つめながら
すうーっとしぶんと、消えてなくなつた。

同時に後ろの位牌の山も、ふわ、ふわっとおのおのに輝きを放つて、
一つ一つ、順番に消滅していった。

「何？何だつて？！」

「今なんだったの？？」

「デジャヴー？？？」

俺は突然の出来事にめんをくらつて、大きなお皿目をぱちくりぱち
くり。
長いまつげを上下にゆらし考えた。

「少女は消えた。そして位牌も。」

「幻だつたのか？」

「それともアーマーが壊れたのか？！」

分からぬ……。

もしこれが幻想ならば、一体、神は俺に何を見せたかったのか？
何を悟したかったのか？

村人たちの温かさ？！人々の未来？！命の尊さ？
はたまた、俺の不甲斐なさか？！

いずれにしても俺にとって、何か意味のある出来事だということは間違いない。

俺は燃え上がる心の炎をメラメラとたぎらせ、

「何が来ても負けない！」

と心に固く決意した。

邪悪な魔魔（前書き）

もつもどりとはできない。俺は前進するしかないんだ！そして憧
れの海へ！”やつ”に近づくにつれ周囲の状況は悪化してくる。で
も、現実から目をそむけてはいけない。困難を乗り越えれば、必ず
未来は開ける！

邪悪な魔魔

ついに”やつ”のおひざ元まで足を踏み入れた。

「何もない・・・・・。」

かろうじて残されたアスファルトの上にポツンと立つ俺の両側は、見渡す限り瓦礫のみ。

人っ子一人見当たらない。動物達の姿もない。

こんなに何もないのは初めてだ。

アフリカから連れてこられた時、巨大なビルや動く乗り物、雜音、クサイにおい、

猥雑な物事に悩まされたものだ。

しかし今は何もない。すべてが流れ、碎け散り、前の姿を失ってしまっている。

やけに透き通った空気は、まるで何かにだまされているようだ。いや、さて、見えないだけか！？

シーンと静まっているこの空間にはやつから吐き出された大量の毒が充満しているはずだ。

別に臭くはないが、その悪質さは脂ぎったおつさんの加齢臭よりもちが悪い。

なんたって生き物を死に追いやる。

あの悪質なやつらが俺の周りに充満しているのだ。

なんてこった。何もないのに、邪悪だけが満タン一杯。

目の前には長く広い道路が地平線までぬううっと伸びるだけ。

「ほんとに何もない・・・・・。」

俺の故郷のサバンナも田舎で何もないが、ここよりはもうちょっと

ました。

なぜなら爆発を起こす怪物もいないし、草も木も一杯ある。新鮮な空気と輝く太陽。のんびりとした時間は何より俺を癒してくれた。

道路は線路と交差して町の中に入った。

周囲の状況を確認しようと望遠レンズで遠くを見てみる。

田んぼの真ん中に学校が見える。高校だろうか。

高台にも学校。小学校と中学校か。

普段なら辺りは子供たちが沢山いるにぎやかな場所なんだろう。授業をサボつて本屋にたむろっていると、

近所の雷親父に怒鳴られそうな古き良きのどかな田舎を思わせる。しかし何かいびつな空気に包まれている。

目を凝らしてみると一つ一つ様子がおかしい。

ただの防風林に見えていた大きな松の木はさかさま。根っこが上を向き、枝が地面に突き刺さっている。

おいしそうに見えていた赤い木の実はよく見ると腐った魚の死骸。内臓がこぼれ出てカラスがおいしそうについばんでいる。

ごつごつした黒いじゅうたんは人間の頭。

たくさんの人間がこちらに頭を向けながら将棋倒しに倒れている。逃げる途中で爆風に押され倒れこんだのか背中の皮は焼けただれ崩れ落ちている。

なんとも不気味な光景を横目に確認しながら俺は海の方向に進んでいった。

このまま行くどんつきは行き止まりのようだ。

何かの工場跡のような場所が見える。

それを取り囲むように道路は左右に分かれている。まるで大事なものを守っているかのように。

右の奥に何かある。うす曇りの空の下。

もくもくと一本筋が立っている。

「”やつ”か？！」

陽炎のよしにゴラゴラと波打ちながら邪悪に満ちた黒い塊が確認できた。

見るからにやっぱそうな姿で、こっちへおいでと手招きしている。あれほどあこがれていた海。

なのに焼け焦げて炎を放つ巨大な悪魔が立ちふさがっている。

「海には簡単に会わせてもらえなやつだ。」

俺はこれから自分に降りかかるであろう惨事を直感的に察していた。

第2章完

邪悪な悪魔（後書き）

いよいよ第3章はクライマックスとなります。キリンの行動に意味はあったのか？キリンは”やつ”との戦いから何を学ぶのか？！主人公のキリンと自分たち市民をダブらせながら、一緒に夜明けの準備をいたしましょう！

お前キーンじゃないのか？（前書き）

目の前に突如現れたのは離れ離れになつたヤツだった。何故会つことができたのか？！感動の出会い。そして2匹を待ち受けるものは？！

お前キリン?じゃないのか?

第3章

潮の香りがセンサーに検出され、海に近づいた事を知った。

なんて二た三て俺か頭で考えるとどんどんサクサク情報が目の前に現れる。

塩分
パーセント。

放射線量

桁が多くすぎる！！

最後の数値だけは知らずに済ませておきたかった。
海岸と並行に走る国道を、ガツチャンガツチャン南に進んでいる。
すると、まるで鏡を見ているような同じふうてい、おなじ大きさの
物体に出くわした。

なんだ？！

「おまかせ下さい。」

そうだ、
そうに違いない！

リン2。

ヤツが今、目の前にいる！

アーマーを付けてこちらに向かってくる。

しかし、まてよ。でも、ヤツは海、好きなんだつけ？？

「海になんて行く氣にもならない！」、「俺は海には行かない！」
「あんな化け物のところになんか絶対に行きたくない！！」

つて、ふてくされて、キレてたよな。

ライフルで威嚇する防護服の人間達。大きな揺れ。国道崩壊。
別々の谷へ落ちて、俺とは反対方向に逃げた？！

あれ以来、センサーはキリン²の識別コードを補足していない。
でも、今まさに前方200m付近にあるスチール塊は、ヤツのコー
ドと一致している。

画面が望遠に変わった。

縁のスクリーン、右上に映し出されたのは間違いなくキリン²だっ
た。

数少ない俺の友人。サバンナ時代から一緒だ！

偶然。なんて偶然なんだ。

「神に感謝します。もう2度と生き物とは会えないと思つていまし
た。」

踊るような喜びが込み上げた。

なぜならここ数日、動いているものを見たことが無かつたから。
無反応な生命感知センサーは、俺をどん底まで心細くさせていた。
ジジジッ。ジジジッ。ジー³。

「ハハハキコン²。応答せよ。」

ノイズに邪魔されながら久々にあいつの声を聞いた。

「おつ、おじつ、おまえ、生きてたんだな！」

なんだか無償に感激し、声がつまつた。

じーじー。がーがー。邪魔なノイズは”やつ”から出た何かが原因だろう。

それでも俺たちは感激しあう両耳を研ぎ澄ませながら相手の会話に耳を済ませた。

「お、お、俺は、ジジ、ジジ、ジジジジ、に、にげ、逃げたが・・・」

「あ、と、を、お、追われ・・・。」

「で、でも、お前にあ・い、あいたくて・・・。」

俺は感激して、居てもたつてもいられなくて、やつを抱きしめた。ガチン、ゴチン。キンッ、キンッ、キンッ！

かすれ会うアーマーの音。

近寄ると会話が鮮明になり、俺たちは久々の友情を確認しあった。

「お前、海は嫌だったんじゃなかつたのか？！絶対に来ないと思つてたよ。」

「ああ、俺もそうしたかった。あの怪物に会いたいなんて、誰も思わない。」

「でも、どの方向に進んでも、最後にはこちらへ向かつてゐるんだ。」

「何故だかさつぱりわからん。」

「誰かに会いたい。そう思つたらここへ来ていた。」

思いが影響を与えたのか？！

それとも何か仕組まれているのか？！

しばしの沈黙があたりを包んだ。

そういうえば、俺もなぜかしらこのルートでここに来た。

もっと安全なコースもあつただろうに。

キリン2も同じように感じていたのか？！

俺たちは動物園でこれを着せられたことから順に頭を巡らせた。

するとやつぱり偶然のようみえるこの事態に、隠された必然を感じずにはいられなかつた。

しかし、悩んでいてもはじまらない。

忘れてはいけない。

俺たち2匹の目前にはメラメラと炎を撒き散らす、"やつ"の影が立ちふさがる。

化け物はもうすぐ近くだ。

友と再び合流し、元気を取り戻した俺は、

またもふつふつとした闘志を燃え上がらせていた。

アーマーを付けたばあさん（1）（前書き）

海に近づいたといひでかいりと光る何かを見つけた2匹。なんとそれは人間のばあさんだった。置き去りにするのか？連れていくのか？2匹は鷹藤の中から本当の正義について考え、命について悩み、そして成長していく。

アーマーを付けたばあさん (1)

ガチャコーン、ガチャコーン、2円並んで海を手指す。

うまい具合に栄養が供給されているのか、今のところそんなに疲れは無い。

しかしのろこ。これだけが難点だ。

いつそのこと空を飛べるようになつていればいいのに。

「ガチャガチャツツ！」

後ろのほうで音がする。

「ああっ、ひょっとして飛べるのか？！」

俺が頭に何かを描くと何らかのアクションが起る。しっぽの下の方からジェット噴射が！

何だかオナラみたいだ！

「ボツツ！」

俺は空に浮きあがつた！が、しかし・・・。

「ボツツ！ボツツ！ボ、ボ、ボボボボ・・・・。」

落ちた。噴射は一発きりだった。

どうやら本格的に飛べるようにはなっていないらしい。

それでも3メートルほど浮き上がつただろうか？！少し面白かった。空をぐんぐん飛べなかつたのは残念無念だったけれども

また何かの時に使えるだろうと割り切つて、のっしのっしこと進むこ

とにした。

しかし、窮屈だ。本当に窮屈だ。アーマーのタイトさに邪魔され
て、思うように足がでない。

歩幅も短い。短すぎる。すりついた長い脚で、そりそりと歩いて
いた日々が懐かしい。

「あーあ、帰りたいな。サバンナ。昔ながらの平和な動物園。」

思わず愚痴がこぼれた。

あれからどれだけ経ったのだろう。キリン2と分かれたり、また、
出会つたり。

色々な事があった。

俺はスクリーンこうしだれで走行中の数字の中から走行距
離を見つけ出そうとした。

150 kmとか、0・6 mとか、10000?とか、300 m?と
か、
わけのわからない数字が目まぐるしく変化する。
単位も違えば桁も相当違う。

「走行距離はどれだらう?…」目が回りだつた。ま、どうでもいいか。

「

蒸し暑く、頭がぼおーっとしてきた俺は

数字を一つ一つ吟味している余裕がなくなり、距離計測を諦めた。
だって、まもなく海岸だ。前だけを見て進もう。
何かしらの施設へと続く広い道路をひたすら歩き、
やつから半径5 km以内に突入した。

その時、前方でキラリと何かが光った。金属の輝きだ。

足早に近付いて行くと、俺たちと同じアーマーをつけた生物だと分
かった。

少し小さこようだ。キリンじゃない。

でも、ロロロロ、ロカピカはまったく同じだ。

もうこの俺たちが距離をつめるとその生物が語りかけてきた。

「はずしておくれよお。へるじこんだよお。たのむよお。」

人間だった。

にわかに信じがたいが、人間のばあさんだ。

苦しそうにしている。本当に苦しそうだ。アーマーをはずしてくれと訴えている。

「何故ばあさんが？ 何の目的で？」

「俺たちと同じ？」

「苦しいんだつたら外してやろうか？」

「でも、今はすしたら、間違いなく一瞬でこのばあさんは死ぬだろう。」

「連れていくか？ いや、俺たちの行く手には化け物がいる。」

「じゃあ、置いていくか？！」

2匹は大きく深呼吸し、脳を活性化させながら悩んだ。幸い大きな道路の上だ。どこからでも見つけられる。

俺は昨日見た二コースを思い出していた。

”立ち入り禁止区域内への一時帰宅実施。”

避難している連中が荷物を取りに帰つてくるのだ。
やつらは必ずこの広い道路を通る。

アーマーの生命維持システムはまだ稼働している。
エネルギーもたっぷり残っているようだ。

「必ず見つけてもらいたい！」

俺はそう判断し、ぱあさんをそのまま置いていく事を相棒に告げた。

アーマーを付けたばあさん（2）（前書き）

しきりに苦しさを訴える婆さん。何が起きたかもわかつていないうだ。残していくのか？連れていくのか？意見が分かれる2匹。やさしいから正義とは限らない。かわいそうだから、親切だから、安全だとも言えない。熱い議論の中でキリンは本当のやわしさとは何か？本当に大切なことは何か？を学んでいく。

アーマーを付けたあさん (2)

ばあさんの置いて立ち去る。すると、キリン2が何か言いたげに俺を見つめる。

どうやらキリン2は反対のようだ。

動物園にいた頃からキリン2は優しい男だった。でも、時にその優しさが間違いを引き起こす。

「一緒に連れて行く訳にはいかないか?」

「何だかばあさん可哀そうだ。駄目か?」

俺が首を横に振ると今度は

「せうだ、せうじいやひつ。」

「はずしてやれば、はずのことはあきらの願いが叶つんだ。」

とキリン2が言った。

「あらがとうねえ。あらがとうねえ。あんたはほんとに優しい子だよ。」

ばあさんはキリン2の言葉を聞いてしわくちゃの顔で笑みをうかべた。

「馬鹿野郎つーなに言つてんだお前。」

俺は叫んだ。

「優しさなんてへやへりゃだつてー。」

「うわべだけのヒューマニズム振つかせしやがつてー。」

「優等生のふりしてんじやねえー！」

「やつらは見えないんだよつー感じなんだよつー。」

「でも、あたりに充満してるー。」

「俺たちを破壊しようと隙をうかがつてるんだー。」

「それをとつた瞬間、ばあは死ぬー。」

「とつた瞬間にだー。」

俺は思わず声を荒げた。

「うわべだけのヒューマニズム?ー。」

「本当に優しくひとせー。」

キロンは困惑気味に向やけられていた。

「本当に今やるべき事?ー何だろつ?ー。」

「食べる?寝る?動く?止まる?死ぬ?こそこそ?これら·····?ー。」

「?ー。」

「やつだ生きることだー。」

「今の苦しさをやらざる。そんなのやくせじやない。」

「その場しげの見せかけだー。」

「今こそ命のなんたるかを本氣で考え、生きなく時だ。」

「生き続ける時なんだ!ー。」

まるで脳みそに雷鳴を受けたかのよつて。

キロンの心が目覚めた!

そして赤子をなだめるかのよつて、ばあむと語りかけた。

「ばあちやん、大丈夫だ。」

「まあちやんもこんなもん着せられて、いやだつたな。苦しこな。」

「でも、やうちょいとの辛抱だ。」

「もつりょとすれば、全部終わるんだよ。」

「俺たち行かなきゃならない。」

「まあちやんがそれを脱げるよつて、ひよつと用事を済ませてく。」

「ねつすればもつれを取つてもいい。」

「わづ、苦しくなるんだ。苦しくなるんだよ。」

「お願いだからもう少しそのまままで面てくれないかい。」

「もう少しの辛抱だからね。」

まるまつた背中を優しくするキリン²に心を許したのか、
あわんばなづき納得した。

正直、キリン²がこんなに上手³よつを説得するとは思つてもみ
なかつた。

俺は手招きで合図をし、キリン²をひびきに呼び寄せた。

「まあちやん納得したか？」

と尋ねると、キリン²は目に涙を浮かべ

と落ち込んだ。

「これでよかつたのかなあ？」

「本当にこれでよかつたのかなあ？」

まあちやんは小ねく手を振つて俺たちを見送つた。
何度も。何度も。

まあちやんはどんどん小さくなつていいく。

そして俺たちはまた、海へと向かつた。

「海” = “やつ”的方に。」

アーマーを付けたばあさん（3）（前書き）

俺の判断は間違っていたのか？それともヤツが馬鹿なのか？まったく元気が出ないキリン²。かわいさ余つて増せ100倍。キリンは邊の叫びを上げる！

アーマーを付けたばあさん（3）

何キロか歩いて、ばあさんはもう見えなくなつた。

潮の香りがキツく感知され、海への接近を知らせていく。

しかし、キリン2の元氣がない。

目はとろんとして霸気が無く、口元は半開き。

俺の後ろを何とか付いてはきていたが、なんだかボーリーと遠くを見つめている。

ひょっとして、ばあさんの事、まだ気にしているのか？

連れていく事もできない。アーマーを脱がせてやる事もできない。ちゃんとわかつてゐるはずなのに。

俺は、塞ぎがちに口を開きながら歩いている相棒を元氣づけようと鋼鉄の尻尾を上下に揺らし、ペペペペペペペペペペとおどりながら見せた。

それでもヤツは元氣がない。

今度はびっくりさせてやろうと、いつか使った背中の放水設備でピュウーっと水をかけてやつた。

水柱は放物線を描きながらヤツの顔に見事命中！

しかし、半開きの口元は霸気を取り戻すことはない。視線はボーリーと遠くに固定されたままだ。

何をやっても駄目。

もういい加減、カツを入れてやろうと、俺はぐるつと首を後方に回すひ後ろ姿を後ろに見て、まくしたてて叫んだ！

「今は非常時だ、前までとは違つんだ！」

「檻の中のあの時とはな！」

「愛想を振りまいていりや良かつたあの時とは！」

突然の出来事にキリン2はぎょっとして立ち直りして立つた。

「わかつてゐるのか？！」

「俺たちは自分の意思でここまで來た！」

「誰に命令されたわけでもない！」

「いつまでも、」機嫌取りのちゅうちん持ちでは居られないんだよつ！」

「自分達の世界を切り拓いて行かなければならぬんだ！」

「俺たちは考へるキリン。自立したキリン。責任を持ったキリン。」

「歴史上はじめて、夜明けを迎えたキリンなんだ！！！」

「よ、夜明け……。」

「夜明けを迎えた……。」

キリン2は俺から何かを感じ取ったのか、また、目にいっぱいの涙を浮かべた。

「分かつてくれたか。」

俺がニツと微笑みかけると、ヤツもほほに涙をつたわせ、半開きの口元にニヤツと笑顔を浮かべた。

勇者たち（一）（前書き）

いよいよ原発の至近距離までたどり着いたキリン達。否応なしに炎と爆発の中に包まれていく。いよいよもう仕舞いか？！彼らは死を覚悟するが・・・！

勇者たち（1）

「やいよ」やつ」の至近距離までたどり着いた。

“やつ”は相変わらず、もくもくと背伸びしながら、天まで巨体を伸ばしている。

まるで悪魔か？！「デーモンか？！」

恐怖のうすら笑いを浮かべ、余裕の表情だ。もくもくと伸びた大きな腕が地上にある全ての者達をじつそり抱きかかえようと迫りくる。

逃げても逃げても後を追いかけてくる。

灰色に染まった胴体には、ポツカリと開いた穴が見える。おそらく雲の切れ目なのだろうが、それはまるでひきつった怪物の口のようだ。

「へえ～ははははははははあ～あ

“やつ”は勝ち誇ったかのように笑い声をあげて俺たちを威嚇する。

「その声は爆発音？！」

「それとも狂気に満ちたやつの叫びか？！」

降り注ぐ灰は間近に迫り、俺達のアーマーを曇らせていく。

あれに包まれたらもうお仕舞いだ！

恐怖に満ちた死の灰が、悪魔と共に容赦なく襲いかかる。

「やられてたまるか！」

俺たちはからうじて屋根が残っているプラント内に逃げ込んだ。

その数秒後、目がくらむほどの光が放たれたかと思うと、

大量の煙に包まれながら大きく空気が振動を始めた。空気の鼓動は徐々に振幅を増し、

遂にはボーンという巨大な爆発音と共にプラントの屋根を吹き飛ばした。

「核爆発か？！」

「いや違う。」

発散された熱量は小さい。引火による氣体の爆発だ。ここには水素が充満していたらしい。

ぽつかりと開いた天井から“やつ”的笑顔が顔を覗かせる。どこまでも追いかけてくる不敵な笑い。

それはやがて猛烈な火柱となつて俺達に牙をむいた。上から、横から。

次は下から、斜めから。

鋭い剣の様に突き刺さつてくる。

まるで、黒ひげ危機一発ゲームだ。

樽に閉じ込められた海賊には、もはや逃げる道はないのだろうか？！幾重にも幾重にも攻撃が重なる。

“やつ”は何故、そこまでして俺たちを殺したいのか全く理解できない。

「所詮キリンが2匹いるだけなのに・・・・・・」

「大した影響力があるとは思えないのだが・・・・」

何回も繰り返される爆発で、建屋と呼ばれる四角い箱は、原形をどめていられないほど粉々に吹き飛ばされた。

屋根もない。壁もない。鋼鉄で作られた頑丈な骨格も無くなつた。しかし、最も熱を発生させている容器だけは何故だか無傷で残つている。

その丸裸になつた姿をはつきりと現すと、怖ろしいほどの熱が発せられているのがわかつた。

容器の底はドロドロ、ぐちゃぐちゃ。

放射性物質のオンパレードだ。

ヨウ素。セシウム。ストロンチウム。プルトニウムまで漏れ出している。

「こんなもんが漏れたらもう取り返しがつかないぞー。」

俺は死の灰がもたらす世界の終わりを容易に想像する事が出来た。しかし、それ以上に現状は苦しい。

何と言つてもダダ漏れの放射性物質で足の踏み場もない。上からは火。下からはドロドロ。

「もういいまでか。」

俺たちは死を覚悟した。

勇者たち（2）（前書き）

絶望のふちにあるキリン達の目の前に強力な助つ人が現れた！
「何故？」

「何故そんなに戦うの？お前たち、死んでもいいのか？」

キリンは守るべきものと自分の命とを天秤にかけながら、自らの生きる意味を問い合わせる。

勇者たち（2）

2匹のキリンは死を覚悟し、じつと構えて辺りを見まわしている。その時。「シユウ～。ジユ～。」と水蒸気が立ちのぼる音がして、動く物体をセンサーは捕らえた。物体は何体もいるようだ。

「動物？！」

「それとも機械か？！」

2本足で立っているその動く物体は器用に道具を使いこなしている。さらに輪郭を鮮明化し、外見や動きを細かく観察してみた。

「に、人間だ！」

何と驚いたことに、ここには人間がいた。

パリッと糊のきいた作業服でもない。演台の前で嘘ぶいているいる男でもない。

もちろん小奇麗なアナウンサーでもない。泥まみれになつた科学防御服。

灼熱の炎の中で懸命に“やつ”と戦う勇者たち。

背中には”DENRYOKU”やら“消防”やらと書かれている。色々な種類が力を合わせ、懸命に作業している。

「こ」の施設の人間か？！」

「それとも違う場所からやつて来たのか？！」

「なんでわざわざこんな危ない場所に来るんだ？！」

ドロドロになつたものはもう2度と固まらない。融け落ちた燃料は

制御できないのだ。

そいつらは被害を最小限に抑えようとしているのか、消火活動をやめようとはしない。

「マジっすか？！」

「そんなにまでして何を守るひつというんだ！」

「一番大事なのは命だろ？！」

人間もまだまだ、捨てたもんじゃなかつた。

動物園では俺達をおいてけぼりにしたが、ここでは何かを守るために全力で戦っている。

俺とキリン2はお互いの顔を見合わせ少しホッとした。

だが、我々が置かれている状況は相変わらずひどい。あたりには炎。

熱。灰。そして残骸。

何よりも、撒き散らされる放射能。

状況を冷静に分析しながら、キリン2と俺はやつらを助ける方法を必死で考えた。

だが、いつこうにいい方法は見つからない。

強靭なアーマーに守られている俺たちと比べて、あの人間たちは軽装備すぎる。

スクリーンに表示される彼らの被曝量はどうどんどん上がっていく。

「マズイぞ。あんなんじゃすぐにやられてしまう。」

「お前たち！逃げるんだ！もう限界だ！」

と心中で叫んだ。すぐさまアーマーの外部スピーカーから警告音と人間の言葉が流れれる。

「ピーピーピーッ！ 危ない！逃げろ！」

それでも彼らは一心不乱。やつに水をかけ続けている。

やがて倒れる者が現れた。一人、二人、と俺たちの視界から消え、燃え盛る炎に飲み込まれていく。

その時、外部から放水が始まった。

白地に赤い丸のマークを付けた迷彩色の防御服。まだら縁だ！
いっぱい、いっぱい外部に集結している。

「これで助かるかも！」

あるものは地上の放水車から、あるものは分厚い鉄板を腹に巻いたヘリコプターから。

“やつ”に水をぶっかけている。水と炎の激しいぶつかり合い。一進一退の攻防が繰り広げられるが、一向に鎮火する気配はない。それにしても、周囲はものすごい放射線量だ。ガイガーカウンターの針はずっと振りきつたまま。

居てもたつても居られなくなつた俺たちは、いつか使つた放水ポンプをまん丸の背中から突き出して

”やつ”との臨戦態勢にはいつた。

しかし、すさまじい攻撃は一向に止まない。

横から灼熱の炎が襲いかかる。配管の亀裂からは高温の蒸気！

俺たちは、右へ左へと攻撃をかわしながら、徐々にやつの心臓部へ近づいていった。

滝のように流れる高濃度汚染水をぐぐりぬけ、カラカラになつた燃料プールに近づいた。

格納容器の底のほうで、シュー――――――――ウツツと言
う音が出続いている。

原形をとどめない赤いドロドロが次から次へと地下深くに吸い込まれていく。

その傍らで人間達は次々と地面に倒れこみ、息絶える。

「なんで？」

「何のために？？？」

命のともし火が、一つ、また一つと消えていく様子を目の当たりにし、またも同じ疑問が頭をよぎる。

「お前たち、率先して逃げた方がいいんじゃないのか！」

この国に住む靈長類は理解しにくいことが多い。

彼らは徳を好む。仁を尊ぶ。

「身を捨てて、浮かぶ瀬もあるれ。」

なんて歌が詠まれた事もある。

独特の価値観を尊いものとして脈々と受け継いでいる彼ら。キリンの世界にはそんなものはない。

サバンナでは危険が迫れば一目散に逃げるのが捷だ。

放射能だらけで真っ赤っかに映るスクリーン越しの人間達は、自分の意思で。自分の誇りで。命をかけてここにいるのだ。

まるで「戦いを不服とするものは、ここには一人もいない」と、俺達キリンに見せつけるかのようだ。

勇者たち（3）（前書き）

キリンの黒い瞳から大粒の涙がボロンボロンとこぼれ落ちる。一体何があつたのか？勇気、死、命、そして愛。2匹のキリンはまた大事な何かを感じ取る。

勇者たち（3）

「うつわあー！」

非情な叫びを上げながら俺達の前に人間が転がり落ちてきた。
防御服は溶け、生身の体がむき出しになっている。

「大丈夫か？！」

「何とか言ってくれ！」

体を揺さぶり呼びかける。けれども応答は無い。
俺は尚も必死で声をかけ続けた。

「おいつ！」

「おーいつ！」

「おーーいつ！」

しかし叫びはむなしくあたりに響くだけだった。

彼はマスクに隠れた首をガクリと横に向け、だらんと体を俺にあずけた。

肩をガタガタ揺すってみたが、もう何の反応もない。

人工呼吸？心臓マッサージ？！色々な方法が頭をよぎる。

「いいアイデアはないのか？！」

あせったキリン²が俺にせついてくる。

「もう待ってはいられないだろっ！」

「放つておけば本当にこいつはお陀仏だ！」

俺は一か八か、彼の胸元に電流を流す準備をした。

蘇生術の中では最も強力でよく知られている電気ショックだ。

最近では装置もコンパクトになって、こう呼ばれている。

「AED（自動体外式除細動器）。

このアーマーにそいつが装備されている事は知っていた。
前にキリン2とじやれあつていた時、わきの下にへんなボタンを見つけた。

それを押してみると手と手の間がスパークした。
面白がつて一日中、2匹でバチバチ感電じっこをしていた事があるからだ。

俺は電極と化した金属の手を人間の胸元に近づけた。

「ショックします。みんな離れて！」

AEDから音声メッセージが流れれる。

ビクッ！…ビクッ！…ビクッ！…

人間の体が何回か痙攣した。ピコン。ピコン。とスクリーンに脈の波形が映し出される。

「やったか！」

2匹は歓喜の表情浮かべ、それまでの緊張を緩めた。

しかし、それもつかの間、「ピ――――。」という連続音が鳴り、波形がまっすぐ平になった。

弱々しかった心臓の鼓動は止まり、彼は完全に息絶えてしまった。

「死んじゃったよ・・・。」

キリン²はいつものように感情を抑えきれなくなつて泣いた。

「何言つてゐんだ！ もつ一回いくぞ！」

「絶対にあきらめない！ 信じれば何でも願いは叶うだらつ！」

俺はムキになつてもう一度電極を彼の胸に近付けようとした。しかし、キリン²はいつものウルウルの目で俺に訴えかける。

「もう静かにしてやれよ。」

「防御服だつて溶けてるんだ。」

「もう戻つて来やしないさ。」

その通りだ。

頑固な爺さんちの婆さんは、ほんの少しの穴が原因で死んだ。

”やつ”は田には見えないから。ましてやこの状況。

少し冷静に考えれば、この人間が息を吹き返す事が無いことぐらい誰にでも判断できた。

「成仏してください。」

2匹は防護服越しに男の顔をじつと見つめ、静かに手を合わせた。男を床に降ろして立ち去ろうとした時、俺はある情景を思い出した。彼が痙攣した時、胸元でキラリと何かが光っていた事を。首飾りか何かだ。確認してみると胸元にローマ字が打刻された金属片を見つけた。

「認識票？」

情報が出る。

軍隊において兵士の個人識別用に使用されるもの。
5cmほどの銀色に輝く金属の札が多く用いられる。
個人の氏名、生年月日、性別、血液型、所属軍、信仰する宗教などを記す。

J A P A N G S D F

名前、姓	・	・	・
認識番号	・	・	・
	19710313		
血液型	・	・	・

「JGSDF?」

「ジャンボ・ゴルフ・セール・デザイン・ファンド?/?」

白い球を細長い金属の棒で打つあれか?そこの会社の株式担当?
まさか株屋がこんなところにいないだろう?!

「ジュニア、ゴシップ、ティフェンダー?」

少年少女を有害情報から守る組織か?

それはいい!子供たちをしつかり守つてやることは大事だ。
でも、この場所とはしつくりこない。

どこかで聞いた事があるカタ仮名語をやたらめつたら並べながら、
データベースを検索する。
すると、何だか適合しそうな言葉を発見した。

「JGSDF?/?」

「一文字足りないけど、まついいか。」

「じゃぱん・せるふ・でいふえんす・ふおうす」

「ジャパン・セルフ・ディフェンス・フォース。」

J S D F . . . J a p a n S e l f - D e f e n s e F o r
c e s .

1954年7月1日に設立された事実上の軍事組織。
日本の領土・領空・領海を自衛する。

「軍事組織？」

「軍隊？軍隊なのか！」

専守防衛を基本戦略に置く日本の防衛組織・・・自衛隊。

「自衛隊！-！」

ここ日本では軍隊の事を自衛隊といつらしい。
ちなみに俺の故郷サバンナでは軍隊をスワヒリ語で「キジョーシ」と
いつ。

武器を持って戦う戦士の集まりだ。

認識番号を確認する。

「19710313」

それをアーマーが読み取ると、人間の身元が瞬時に田の前に表示された。

出身地 県 市

年齢 35歳

家族構成・・・妻1人、子供2人。
その他・・・・。

「えつ 家族？！子供もいる！」

「何しに来た？！誰の命令で？！」

「ここが地獄だと知っていたのか？！」

「信じられない！愛する者を残してまで来たといふのか！」

「かけがえのない子供達も！？」

「何故だ！何故なんだ！！」

俺は彼の人生に思いを寄せた。

「いっつてらつしやあーい！」

と眠い目をこすりながら送り出す小さな笑顔。

「気をつけてね。」

と、温かくさりげない愛情で夫を見守る妻の姿。

コイツが爆発したあの日の朝、どんな思いでこの迷彩服の男を送りだしたのだろう。

出発前に基地で水杯を交わし、毅然と敬礼をする。

「もう二度と戻れないかもしね。」

そんな思いをかなぐり捨ててここにやって来た。
片道切符を握りしめ、ホースと水を携えて
この地獄にやって来た。

「誰の為に？！」

「何のために?!

分かり切つてはいるが、自己保身の為ではない。

この国の、人々の、そして愛する家族の為に、命を投げ出して働いてくれた。

そう思うと、つぐづく俺達キリンの無知を痛感してやまれなくなつた。

俺の目から大粒の涙がポロンポロンとこぼれ落ちる。

伝えたいことがいっぱいあって言葉にならない。

そんな時、代わりに涙が出るものだ。

「ありがとう!」

「ありがとう! ありがとう! ありがとう! ...」

何故だか無性に心が熱く、切なくなつて、

俺は横たわる人間のオスを無意識にキツく抱きしめていた。

あやつり人形　（1）（前書き）

「しかしながら、俺たちはなんでこんな危険な場所にいるんだ？！」
キリンは根本的な疑問にぶつかる。

まさかヒューマンドラマに参加するためではないだろう？！
キリンは自分自身に本当の目的、本当の真実を問い合わせる。

あやつり人形（1）

「しかしながら、俺たちはなんでここにいるんだ？！」

俺は急に現実に引き戻され自分自身に質問した。
まさか感動の人間ドラマに出演する為？！
いいや、違う。海に行きたかっただけ。ただそれだけ。
こんな危険なところをわざわざ通る道理も義理もない。

「誘導ミスか？！」

核物質まみれの建屋中心部を突っ切ろうとしているキリン2匹。
実に滑稽だ。

アーマーのヘルメットには相変わらず大量のデータが流れ出て、
行くべき方角を表示する。

ピコン、ピコン、ピコンピコンピコン……。

高周波の信号音が「早く、早く。」と、俺達をせかす。

そして、答えを探している。

でも、なんとなくおかしい事は気付いている。
なんとなく。なんとなく……。

ぼーっとしている俺をたたき起こすかのように、再び大きな爆発が
起きた。

大きな大きな爆発だ。

「今度こそ本当にお陀仏か？！」

でつかい衝撃は、熱と灰を撒き散らしながら建屋を完全に吹き飛ば
し、

辺りを火の海へと変えていく。

「あいつらはどうする？！人間達！」

「助けに行くか？！」

やつぱりキリン₂だ。本物のセンチメンタリスト。

「馬鹿言つんじゃない！」

「死に行きたいって言つのか？！」

俺は彼の意見を一蹴した。

「人間達も全滅だな・・・。」

お決まりのウルウル黒目で、キリン₂は俺を見つめた。
まっすぐ伸びたキノコ雲は、新しい一体の巨大な化け物となり、
俺たちを強烈に威圧する。

空いち面を覆い隠すどす黒い灰とす。

黒い雲がどこもかしこも暗黒の世界に包み込んでいく。
どんどんと、どんどんと、大きく広くなつて、
もはや地球を全て覆つてしまふのではないか？！と思つほどの巨大
怪物に成長した。
そいつはまるで人間達の知恵と文明をあざ笑つかのように、勝利の
歓喜をあげている。

「でも、どうして人間達の戦いに俺たちキリンが巻き込まれている
んだ？」

釈然としない気持ちに包まれた俺は

「これって、本当に俺が望んだ事なのか？海に行きたい」といつ俺の夢？！

「本当に俺の意思？！」

と、アーマーのパソコンパーテーではなく、自分自身の胸に問いかけていた。

あやつり人形　（1）（後書き）

次話「あやつり人形（2）」で、何故キリンがここ来たのか？いよいよ明らかに！

あやつり人形（2）（前書き）

俺たちは本当に自由なのか？！なんだかおかしい気がするぞ？！
「marionette」と書く意味ありげな単語。
ここは原発中央部。
もっとも危険で、もっとも重要な施設の中で、キリンは重大な真実
に直面する！
さて、お氣楽キリンはどうなる！

あやつり人形（2）

アーマーの高速でミスのないプロセッサーは、なんだか困惑氣味だ。俺の要求は、そんなに君を苦しめるものだったのか？！

「ビームにウソがある。確かめたい。」

そう思った俺は、アーマーのプロセッサーに全神経を集中させながら今まで起こったあらゆる出来事をリロードし、再解析した。目の前に流れ出る膨大な量のプログラムが俺の脳幹に飛び込んでくる。

「……。」

「おかしいぞ！……！」

「ビームに絶対に何かある……！」

解析も中盤に差し掛かつた、20京11兆3億と11番目の行の中。ひときわ目立つ、おかしな言語の記述を見つけた。

「VNCE · · · MARIONETTE · · ·」

それは明らかに他の単純なプログラムには見当たらぬ長くて複雑な文字列だった。

俺が動物園を出て、海に行く事を決心したあたりの行。

そう、脳が機能しなくなつて、顔を緩めてよだれを流していた時や、危険な半径10km以内に進入した時。

それに死の灰を避けてプラント内部に逃げ込んだ時など。

俺が何か重要な判断した時には必ずそこに記されている。

どうやら、外部からの通信によって埋め込まれたものらしい。

それは俺がとつてきた行動に大きく影響を与えてきた紛れもない痕跡であり、

何者かがこのアーマー型の装置を操っていた疑いの無い証拠だった・・・。

そして確信が持てた。

「自由じゃない・・・。」

そう。自由なんかじゃなかった。

檻から解放された俺達は、やっぱり囚われの身だった。

動物園を出た時の言ひよつも無い開放感も、希望に満ちた夢の冒険

も、

全部ウソッパチだった・・・。

ピンチに出会つた時の驚きも、悲しみも・・・。

全部仕組まれたストーリー。

誰かの描いた物語の上を、ペン先でなぞるよつに操られていたのだ。

「や、そんな・・・。」

キリン二は、またいつもウルウルだ。

「この装置は、正義の味方では無かつた。」

「頑強で安心安全な鎧でも無かつた。」

「俺達を守る事が目的じやなかつたんだ！」

「じゃあ何のためにこれを着せたんだ？！」

「一体誰が？何の為に？！」

俺は腹の底からわき上がる怒りとともに言ひよつも無い悲しみに襲われた。

本人の意思とは全く無関係に動き、進み、巧妙に海の方角へ向かわせる。

そして気付いた時にはもう手遅れ。到底、後戻りなんかできやしない。

「本当の目的地はここだったのか……。」

ここは光り輝く海なんかとはほど遠い、原発内部のコントロールセンター。

格納容器のすぐそばの部屋。

地獄の真つただ中だった……。

あやつり人形（2）（後書き）

何故？！何のために？！御用学者がチクリと刺して行つたチューブは脳幹にまで達していた。どこのだれかは知らないが、何故俺達がこんな目に！！次話「キリンの夜明け（3）」でキリン達のミッシヨンが明らかに！

私達は本当に自分の意思で生きているのだろうか？ひょっとして誰かの描いたストーリーにあやつられているだけ？
巧みに誘導され、無知のまま生涯を送る・・・。
キリンは代弁者となり叫びます！

あやつり人形　（3）（前書き）

コントロール。行動だけじゃない。進路だけじゃない。俺たちは意識までコントロールされていた！虚無の世界に襲われながら、現実に直面する2匹のキリン。これからどうなってしまうのか！原発中心部でキリンが叫ぶ！

あやつり人形（3）

センターはまさに原発の中核。

ここは分厚いコンクリートと何層にも重ねられた鉄板とコンクリート、

それに加え、鉛や天然重畠石を熱く塗り重ねた強固な部屋。俺達がそこの重々しい金属の扉に近づくと、アーマーから自動的に赤い光線が放出された。

「ピッ！」と言つ認証音が鳴り、ドアのロックが解除される。音を立てる事も無く、重厚な扉がスルスルと開いた。

まるでお化け屋敷のドアのように・・・・。

「俺、入るの嫌だ！」

キリン2が足をバタつかせ抵抗した。

しかし、所詮、無駄な抵抗。俺達になすすべも無かつた。

アーマーは何事も無かつたかのように、自然と中へ入つて行く。

「ま、まじで！」

「もう俺達の意思は通じないって事？！」

キリン2は事態の急展開についていけない様子で、ビビりまくって言つた。

「もつ、仕方ないか・・・。」

「ここまで来ちゃつたんだ。入るしかない！」

俺は持ち前の好奇心を發揮して、中の様子を覗き込んだ。部屋の内部は以外にも綺麗だ。

あんなにひどい爆発があつたのに、損傷の形跡は微塵もない。全く不思議なもんだ。

「こんな頑丈に作れるの？！」

「じゃあ、はながら全部、壊れないように作れよ！」

根本的な疑問が俺を苛立たせる。

「よっぽど大事なものがあるんだな。」

「だからここだけやけに頑丈に作つていい。」

「誰にも渡せない何かがキットある！」

大事なものとは一体何だろ？

何人もの人間が死んだ。犬、ネコ、鳥、虫。そして植物。いくつもの命が無くなつた。

「命より大事なもの・・・。」

「人間達はそんなものを持つてるのか・・・？」

キリン²と顔を見合させながら熟考に熟考を重ねた。

²匹は脳をフル回転させたが、なかなか結論が出ない。

でも、一つだけ見えてきた事がある。

そう、ここには爆発当時から今に至るまで、全てのデーターが保存されている。

何台も列をなす最高のスーパーコンピューターがある。門外不出のブラックボックスだ。

「なんか嫌な予感がするな・・・。」

俺達は無意識に進んでいき、計器類がたくさんついたコントロール

ボックスの前まで到着した。

すると、なにやら2匹の胸元でカチャカチャ音がし始めた。それと同時に、首の下からニヨロツと何かが姿を現わす！――

「ギヨシ！」

一
蛇！！

嫌な予感的中！ビックリ箱から蛇が飛び出した！

「オーマイガー！」

キリン2は恐ろしさのあまりブルブル震えたが、蛇はお構いなし。

「キュイイーン。」
「シユルシユルシユル。」
「カチャ！」

コントロールボックスに付いている金属製の丸い穴に顔をズッポリ突っ込んだ。

۷۰

大量の信号がこちらに転送され、次から次へとアーマーのメモリーに保存していく。

「一ノ山」

「御用学者たちは」のデータが欲しかったんだ！」

「俺たちに意志なんてなかつた……。

最初から仕組まれていたんだ！！！」

「向かうよつて誘導され、その目的をあからさまに叩撃した俺

は、何だか無性に腹が立つた。

あんなに、あんなに憧れていた海。光り輝くサンシャイン。
夢も、希望も全部ウソっぱちだった・・・。

2匹はお互いの顔をマジマジと見つめながら、まん丸黒目で涙を浮かべた。

あやつり人形　（3）（後書き）

次話「あやつり人形（4）」で、キリンは本当の幸わせとは何か考
えます。

あやつり人形（4）（前書き）

本当にあやつり人形だった。知っていたか？！俺たちの繁栄が！俺たちの栄光が！あの恐ろしい”やつ”によつて支えられてきた事を！キリンは自分の無知を知り、もう一度自分自身に問う。そして深い闇の中で、もう一人の自分にめぐり逢い・・・・・。

あやつり人形（4）

「ピ――――――――――――――

耳をつんざくような大きな警告音が鳴り響き、
転送完了のサインがスクリーンに表示された。

"Warning！" 赤いランプの点滅とともにコントロールボット
クスからうすら煙が上がる。

またも嫌な予感。

「危ない！」

「ドンッ！！」

小さな爆発が起き、さつきまで田の前にあつた大量の設備がことごとく破壊された。

強い衝撃波は俺達をふつ飛ばし、あたり一面を瓦礫だらけに。
俺は運良く開きっぱなしの入り口から部屋の外に転げ出た。
しかし追いたてるように爆発は襲つてくる。

部屋から炎が噴き出し、廊下をくまなく焼き尽くした。

それからも何度も同じような爆発が続く。

まるで何もかもを隠滅したがっているかのように・・・。

連鎖的に立ちのぼる火柱が灼熱の渦となつて俺に襲い掛かった。

「！」を乗せらなきや駄目だ！」

「！」さえ無事に抜け出せればなんとかなる！」

自分自身に気合を入れた。

が、どこかに頭でもぶつけたのか、徐々に意識が失われていく。

そして、何だか心地よい気分に包まれ、深い深い闇の中にいざなわ

れていった。

ぼんやりした頭の中で、今までに経験した自分の人生、いや！キンシ生がグルグル輪になつて駆け巡る。

「これは夢か？現実か？」

しばらくすると、暗闇の中にフォーマルスーツを着こなした、もう一人の俺が現れた。

冷静で冷ややかな声。

「よく聞こえない。」

「何を話してんのだ？！」

耳を澄まして聞いてみると、ざつやから過去の出来事を回想しているようだ。

シビアに、そして淡々と・・・。

「すべて嘘だつたのかもしれない！」

手に差し棒を握り締めた人間型の俺は、毅然と聴衆に言い放った。
そう、俺の送つてきキリン生活は、まるで「あやつり人形」のよう
だつたと・・・。

檻の中にいれば食べ物は人間が運んでくる。

エネルギーもバンバン使えた。

あの2本足達は幸せそうに俺達を見にやつて来る。
頼んでもいないのに。

動物園ではしつぽを振つたり、首を伸ばしたり。

愛想を振りまいていたら、自動的に生活は成り立つていた。

特別な困難もなく、だらだら生きている事が出来た。

キラキラにライトアップされた夜の動物園。

俺達は最高に輝いていた。

まさにそこはキリンにとって最高のステージ。

しかし、使用するエネルギーは膨大だ。

サバンナ生活の何億倍、何兆倍だったのだろうか。
それを支えていたのはまさにこの化け物。

”やつ”なのだ！

暴れ狂う”やつ”！”やつ”そのものなのだ！！！

普段は意識する事は無い。

どこでどんな風に”やつ”めいでているのかも知らなかつた。
いや、そうじやない！俺たちは知るうともしなかつた！

そして、今、”やつ”は怒りに満ちて爆発した！

もう2度と戻る事はできない。

”やつ”の死と引き換えに、あの最高のステージは無くなつた。
きらびやかな照明もなくなつた。

華やかなパフォーマンスも。

子供たちの歓声も。

胸躍る明るいバックミュージックも・・・・。

「何もかも無くなつたんだ・・・・。」

一通り解説を終えると、もう一人の俺はスーーーと姿を消した。
グルグル駆け巡る思い出の世界もそれと同時に終わりを告げた・・・

華やかな夜の動物園も閉園し、人っ子一人いなくなつた。

静寂だけがシーンと残る。

無人となつた動物園は、静かな静かな原始の森へ徐々に姿を変えて
いつた。

あやつり人形（4）（後書き）

次話。夢の中でへんてこな事実に直面したキリンは人間達のエゴに怒りの声をあげる！

夢（1）（前書き）

氣を失つたキリンは夢の中で、ある光景を目撃する。
そこには人間達のエゴが充満していた・・・。
ホント、呆れて物も言えない・・・。

夢（1）

原始の森をぐぐり抜けたと、闇の中にモワモワッと雲が立ち込んだ。真ん中に何かが見える。

なんなくほんやり映し出されたその光景は、いつかどこかで見たような気が・・・・。

朝方のまどろみの中。

そう、

途中になつた夢の続きを何かのきっかけでもう一度リプレイしてしまつたよつの感覚。

「あー、やつやつ、これこれ、さつや、これあつたよな。」

つてやつ。

雲の真ん中に人間達が見える。

楕円形のテーブルを囲んで、しきりに何か言い合つてゐる。ある者は誰かを指さし罵倒している。

ある者は口をへの字に曲げてむつつり顔。

みんなの真ん中に座つてゐるトロロンとした顔のおじさんは、じつと目を閉じ、腕をくんでうつむいてゐる。

「寝てるのか?!」

「起きてるのか?」

まあ、なんともお氣楽な・・・。

議論の内容をよくよく聞いてみると、どうやらおじさん達の群れは、お偉いさんの集まつて分かつた。大事な会議の真つ最中だ。

「あいつはどうなってる？…」

「ほり例の。」

「あの、あのアーマーを着せた動物！！」

「ほら、あのキリンだよ！キリン！…」

「あれはどうなってるんだ！…！…！…！」

「まつたくなしのつぶてにして…。」

「いい加減な事を言うなっ…！」

「同盟国から矢の催促だぞ…！…！」

真ん中のトロンとした彼が立ちあがって叫び。

「え～その件につきましては…。」

「つ・き・ま・し・ては…！」

「私のところに何の情報も、入つておりません！」

「すべては、私の言う事を聞いてくれない意地悪な人達の責任です。」

「私はちつとも悪くありません。」

俺の意見は、「だから？」だ。

とつても都合のいい言葉。

なんで、すぐつと立つてすぐ言い訳？！

「情報が入つておりますん。」つて、情報が無いと、責任も無い・・・
・?つて事？

「はあ？」

「あなた、この国のトップじゃないですか！」

「知らないじゃ済まされませんよー。」

まくしたてるおやじ達。

「えへ、その件につきましては……。」

卷之三

「みんなが、私の『』のことを聞かれてません……」

「の・で。」

- १८ -

卷之三

だから、いつたい何を言いたいのか。

腰包わせた金剛、三が点・・・。

「だからねえあなた。・・・・。」

呆れてものも言えない。

目の前で繰り広げられる関西風の新喜劇。

笑ってよしのか 悪いのか?

一体どうしたらよいのだろう? —

この前、死んだ口ッケ歌手が“呆れてものも言えない”なん

四三

多分、彼もこの状況に似た場所に居合わせただろう。

「やまし」だらけのこんな場所にね。

停滞した状況に堪えかねたのか、仏頂面のおじさんが叫んだ！

「こんな事をしているとねえ。票が減りやうんだよ……」

「票がつ……！」

「怒つても仕方がないだろ……。」

そう思いながらも、俺は心の中で叫んでやった。

「豹つて、お前、見たことあんのか？！」

「俺と同じ黄色に黒の点々、しかも早えしゃつ……」

「減らねえつつーの……豹はつ……！」

「豹はサバンナだつつの……！」

「サバンナツ……！」

昔から声高に叫ぶ人は、何か別の目的を持つている。

叫び声は、ただのっこ遊びで、真実は全く別。そんな事はわかっている。

だから「票と豹」の違こくらこどうひことない。

このおじさんの本心もどうでもいい。

どつちみちあんたを変えることなんて出来やしないだらうから……。
・・・・・。

「数が、力なんだ！」

「選挙はウかつてナンボなんだよ！ナンボ！！」

「まったく君ら、勉強不足だよ……！」

「ウかる？？？」

「鶴・狩る？？」

鶴が狩りをするのか。

それだつたら、俺も知つてゐるぞ！

ちようどこの国の真ん中ぐらい。日本アルプスっていうのかな？！
でつかい山よりちょっと左下のほう。

何とか川で、船の先にたくさん鳥を付けたアレだ、アレ！――
かがり火を焚いて、腰蓑をつけた人間が淡水魚を捕まえるアレ。

「う・か・い。」

「鶴飼い！」

でも、何でこのおじさん、選挙で淡水魚を取るのだろう？

塩焼きにして配るのか？

それは駄目。

有権者に物をあげると選挙違反になってしまつ。

怒つてみたり、冗談を言つてみたり、よくわからない連中だなあ。
俺は、必要以上にテカイ声で

「お前らはおかしい――――――」

と叫んでやつた。

でも、彼らにも得意技はあるよつだ。

敵を呆れさせ、骨抜きにし、戦闘能力を奪つていく。
だらだら、だらだら、時間を遅らせて、
みんなの記憶力・思考力を低下させる。
そのテクニックはキリンには無い。

「すごいぞ！」

「アーティスティック」

「なんてすごい技なんだーー！」

俺はなんとなく“やつ”が爆発した理由を感じ取っていた。
自分達が「やつちやつた事」を会議室でなすりつけ合いつながら、
“やつ”的を見て見ぬふりしてたんだ。

責任を擦り付け合っているうちに、もひどいじょうも無くなつたんだな。そして、やつ、の怒りは爆発した。

そして“世一”の怒りは爆発した

「だからと言つてキリンにケツを拭かせる？！普通？！」
「呆れてものも言えない・・・・・。」

エゴにまみれた2本足の生物・・・・・・。
そんな人間達が急に悲しい存在に思えた。

呆れてものも言えなくなつて黙りこくつてしまつた俺は、また、真っ暗で静かなレム睡眠状態に落ちていつた。

夢（一）（後書き）

再び深い眠りについたキリン。夢の中で、また面白いものを見つける？！

夢（2）（前書き）

ほんやりと浮かび上がる物体はどこかで見た四角い箱。何かが映し出されている。“ヤツ”について解説しているメガネのおじさんは寂しげに故郷の村を去つていった・・・。

夢（2）

あれれ、遠くにまた何かが見える。
ぼんやりと浮かび上がる四角い箱。

フニャフニャと揺れながら、徐々に輪郭が姿を現した。
正面の真ん中に何か見える。うつすらと人影の様な何かが・・・。
よく見ると顔のようだ。しかもキリンでは無い。
人間だ。悲しみを背負つた2本足。

「ひょっとしてテレビ?！」

「見たことあると思つてたんだ！」

それもそのはず、田の前にある四角い箱は、この前拾つたテレビそのものだった。

テレビの中では口ミカルな掛け合ひが繰り広げられる。
ひな壇におじさん達が並んでいて、真面目に話したり、納得しあつて微笑みあつたり。

おばさんも座つてゐるぞ。うるさそうな感じだ。

前列のおじさんが後ろを振り返つて怒つてる。「これはやばい。上の段の端っこにはお姉さんがいる。

ポニョンとして、愛くるしい。前列のおじさんは彼女が大のお気に入りのようだ。

本当にいろんな種類が揃つてゐる。人間展覧会。

これぞ、まさに生物多様性と言つべきか。

サングラスをかけた短髪のおじさんが騒ぎ出した。どうも彼が一番偉いらしく。

「司会者つていつのかな?！」

時折、扇子でどこかを指したり、開いて自分を扇いでみたり、ひな壇の前をせわしく動き回っている。

ハイパフォーマンスな人間のオスだ。

演台では誰かが何かを主張している。

メガネをかけたおじさんが猛烈に熱く語っているぞ。

目じりを下にして、にこにこしながら、毅然と語る。

「ヨー素を配れ・・・」だの

「バイクを配れ・・・」だの

「何とかカント力 etc.」

「絶対に壊れないものなんてないんです！」

「もし、壊れたらどうするんですか？」と、私は聞いたんです。」

「じゃあ、相手は壊れないと言つ。」

「だから、もし壊れたらどうするの？」と私は聞いたんです！」

メガネおじさんは声のトーンをだんだん高くし、叫んだ。

「ひょっとして、“ヤツ”が壊れた話？！」

俺はピンと来た。そう、この世の中に「絶対」は無い。自然のなりわいは神のみぞ知る。

でも、“ヤツ”を作った人間達に自然の法則は当てはまらなかつたらしい。

「絶対に壊れません。」

「壊れないから安全です。」

「安全だから大丈夫です！」

「大丈夫だから、壊れません！」

「「われたやん……。」

俺はサングラスの同会者に影響されたのか、関西弁でため息混じりに言つた。

しかも、壊れた後はこうだ。

「メルトダウンはしておりません。」

「安心して下さい。」

「放出された量は微量です。」

「安心して下さい。」

「健康に対する直ちに影響はありません。」

「安心して下さい。」

まるで、神様にでもなつたように発表し続けた。

いや、神様だったのかも知れない。

少なくともしばらくの間は・・・。

だって、安全だつて言い切れるんだから。

「安全神話」なんて言葉もあつたくらいだ。

「神話ですよ！神話！」

「神話つて、作り話でしょ！ほんとに俺達、安心できるの？！」

俺は不思議で不思議で仕方が無くて、長い首をかしげて悩んだ。メガネおじさんはこの国にウソつきがいっぱい居ると言つている。

“ヤツ”は最初から壊れるようになつたんだつて。
小さい揺れしか想定してなかつたんだつて。

ジャパニーズストラテイショナル「TSUNAMI」も来ない事になつてたんだつて。

「ウソ？」

「ホント？」

「ホントに想定外だつたの？！」

メガネおじさんの言う通り、みんな本物のウソつきなのかも知れない。

だって、俺見ちゃつたから。

邪悪な雲が手招きして俺達を呼んだのも。

きのこのような大きな大きな灰色の悪魔がドーンと立ちふさがつたのも。

全部見ちゃつたんだよね。

そして線量計の針は振り切つたままになつた。

メガネおじさんは言ひ。まだまだ言ひ。

「大切な子供たちを守ろう！」　と。

よくよく話を聞いてみると、昔はみんな仲間だつたんだって。

メガネおじさんも神様達も。

メガネおじさんは悪魔に魂を売りたく無かつたから、故郷の村を出たんだつて。

村の名前は「原子力村」。

村人達は原子力を平和利用して、明るい未来と科学の発展、人類社会の福祉に貢献するつもりだつたらしい。

象徴的なキャラクターは力持ちの男の子だ。

右腕を大きく前に突き出して、足の裏から火を吹いて飛んでいく。

正義を貫くかわいい坊やだつた。

名前はアトモだつたつけな？！ア・ト・モ。

そう言えば昔アダモちゃんつてのが居たな？！

「アーダモちゃんつハイツ！」

て、いつも言つてた。

あの原住民は随分と人間らしかつたな。
だって、自然そのものだもの。

「ア～ダ～モ～ス～テ～！～ペイ！～」

とも言つていたぞ。

日本語に訳すと

「あんたなんか知らないよ。ふん！～」

ところの意味らしい。まさしく村を出て行く時にピッタリの挨拶だ。

「お前らの行動は、もはや理解できぬ！～ペイつ！～」

つて感じ。

メガネおじさんが出て行つた原子力村には沢山のキャッシュが集ま
るらしい。

たいそうお金持ちの村だそうな。

「集めたお金はどうに行つちやつたの？～！」

「街はこんなに壊れてるのに。」

「そのお金で早く直してあげてやれ～！～」

そして神様達に言つたのです。

「ア～ダ～モ～ス～テ～！～ペイ！～」

「あんたなんか知らないよ。ふん！～」

もう、どうもいつにも縁想が取れて

俺は「ペイツ……」のところで睡がはじけ飛びぼびなんだ！

テレビをのぞいてみると、メガネおじさんの順番は終わるみたい。キツネ田のオスが

「はいっ、それでは次のテーマに移りたいと思いますっ！」

と言つて、順番を終わらせちゃつた。もつと見たかったのに・・・。キツネ田と言えば、お菓子屋さんから大金を取つたやつもキツネのよつな田をしていた。

俺達キリンはクリクリお田田だから、犯人ではない。それに正直だし。

ひょっとして人間達はキツネと共に通する遺伝情報を持つているのかな。

それを言つならタヌキとも。だつてウソばっかりつくし、すぐに入を化かすから。

人の心を迷わして正常な判断を狂わせる・・・。

「さらば原子力村・・・。」

メガネおじさんが田じつをたらして寂しそうにそろそくと、周りが急にシーンとなって、

テレビの電源はブツンと切れてしまった。

俺の脳みそでは、神経軸索・AXON が「あんたなんか知らないよーふんっ！」

とこう強い信号を出力し続けている。そして、残された暗闇には「ペイツ！！」の響きだけがいつまでも、いつまでも、こだましていた・・・・・・・。

夢（2）（後書き）

「あんたなんか知らないよ。ふん！」つて神様気取りのやつりと言つてやるつー脱原発！！
「ア～ダ～モ～ス～テ～！～ペイ～！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1181x/>

キリンの夜明け

2011年11月20日12時52分発行